

市川市国府台遺跡第192地点

— 国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書1 —

平成31年3月

千葉県教育委員会

いち かわ し こ う の だい い せ き だい ち てん
市川市国府台遺跡第192地点

— 国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書1 —





古代道路跡 (SF-001) 全景 (南から)

序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業に係る発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第30集として、国府台県営住宅建替事業に伴って実施した市川市国府台遺跡第192地点の発掘調査報告書です。調査成果としては、弥生時代後期の竪穴住居跡を検出するとともに、奈良・平安時代の両側に側溝を持つ道路跡、大溝を検出しました。道路跡は下総国府の中核施設である国庁推定地に続く直線道路であり、下総国府の造営と整備の過程、奈良・平安時代の交通の様相を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成31年3月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 古泉弘志

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部都市整備局住宅課による国府台県営住宅建替事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を取録したものである。
国府台遺跡第192地点 市川市国府台一丁目2-5ほか（遺跡コード203-003（192））
- 3 発掘調査から報告書作成に至る整理作業は、千葉県県土整備部の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章第1節に記載したとおりである。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節1と2の石器を主任上席文化財主事落合章雄、その他を文化財主事垣中健志が担当し、編集は垣中が行った。また、附章の火山灰分析については（株）パレオ・ラボに委託した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部都市整備局住宅課、市川市教育委員会、市立市川考古博物館、和洋女子大学文化資料館、千葉商科大学、古代交通研究会、近江俊秀、山路直充、加藤貴之、吉村武彦、鈴木靖民、栗田則久ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1～4・30図 市川市発行 1/2,500 市川市地形図を編集
第5図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「松戸」「船橋」を編集
第31図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「市川驛」「八幡町」を編集
- 9 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。図版2の航空写真は米軍による昭和27年撮影のものを使用した。
- 10 遺構や遺物の図面に使用したスクリーンパターンなどの用例は以下のとおりである。挿図中の「K」は攪乱の略である。



焼土



黒色処理



赤彩



須臾器断面



硬化面範囲



溝範囲

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 事業の経緯と調査概要	1
1 事業の経緯と経過	1
2 調査の方法と概要	3
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の成果	9
第1節 旧石器時代・縄文時代	9
第2節 弥生時代・古墳時代	11
1 竪穴住居跡	11
2 グリッド等出土遺物	17
第3節 奈良・平安時代以降	20
1 道路跡・大溝	20
2 グリッド等出土遺物	33
第3章 総括	41
第1節 旧石器時代・縄文時代	41
第2節 弥生時代・古墳時代	41
第3節 奈良・平安時代以降	42
1 国府台遺跡と周辺の遺跡の調査成果と道路・区画溝	42
2 下総国府の変遷と道路	45
附章 国府台遺跡第192地点のテフラ分析	51
写真図版	
報告書抄録	巻末

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	7	第7表 銭貨計測表	40
第2表 弥生時代・古墳時代土器観察表	34	第8表 分析試料とその特徴	51
第3表 奈良・平安時代・近世土器観察表	37	第9表 テフラ試料の湿式篩分け・ 重液分離の結果	52
第4表 土製品計測表	40	第10表 4φ篩残渣中の鉱物組成	52
第5表 奈良・平安時代瓦観察表	40		
第6表 金属製品計測表	40		

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の地形図	2	第17図	弥生時代グリッド等遺物	19
第2図	グリッド配置図	3	第18図	古墳時代グリッド等遺物	19
第3図	上層遺構配置図	4	第19図	SF-001 遺物	20
第4図	下層グリッド配置図	5	第20図	SD-001 遺物	21
第5図	国府台遺跡第192地点と周辺の遺跡	6	第21図	奈良・平安時代道路跡(北側・1)	22
第6図	国府台遺跡第192地点標準土層	9	第22図	奈良・平安時代道路跡(南側・1)	23
第7図	石器出土地点と土層	9	第23図	奈良・平安時代道路跡(北側・2)	24
第8図	旧石器時代石器	10	第24図	奈良・平安時代道路跡(南側・2)	25
第9図	縄文時代遺物	10	第25図	SD-004 遺物(1)	27
第10図	SI-001	11	第26図	SD-004 遺物(2)	29
第11図	SI-002	12	第27図	SD-004 遺物(3)	31
第12図	SI-003(1)	13	第28図	SD-004 遺物(4)	32
第13図	SI-003(2)	14	第29図	グリッド等遺物	34
第14図	SI-003(3)	15	第30図	国府台遺跡の古代道路想定図	43
第15図	SI-004(1)	16	第31図	迅速測図に見る古代道路	46
第16図	SI-004(2)	17	第32図	火山ガラスの屈折率測定結果	52

図版目次

巻頭図版	古代道路跡(SF-001)全景	図版8	旧石器時代遺物・縄文時代遺物
図版1	航空写真(S=1/10,000)	SI-001・002・003	
図版2	航空写真・石器出土地点・堅穴住居跡(1)	図版9	SI-004
図版3	堅穴住居跡(2)		弥生時代グリッド等遺物・古墳時代遺物
図版4	堅穴住居跡(3)・道路跡(1)	図版10	SD-001・004(1)
図版5	道路跡(2)	図版11	SD-004(2)・グリッド等遺物
図版6	道路跡(3)	図版12	SF-001・SD-004(3)
図版7	大溝	図版13	テフラ分析試料の偏光顕微鏡写真

第1章 はじめに

第1節 事業の経緯と調査概要

1 事業の経緯と経過（第1・3・4図）

千葉県県土整備部都市整備局住宅課では、老朽化した公営住宅の効率的かつ円滑な更新を行うため、県営住宅の建替・建設事業計画を策定した。この計画に基づき、建設から約60年が経過し、建物の老朽化が進んでいた市川市国府台県営住宅の建替事業が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である国府台遺跡に位置していたため、遺跡の取扱いについて平成26年に千葉県教育委員会と協議を行った結果、事業の性格上、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は建替工事の工事計画に基づいて事業地内の3棟の建物の解体順に沿って実施し、その後、調査完了箇所に仮設道路を設置し、建物間の道路部分の調査を実施した。調査の結果、弥生時代竪穴住居跡4軒、奈良・平安時代道路跡1条、溝1条を検出した。このうち、奈良・平安時代の道路跡は、下総国庁推定地の南面に延びていたと考えられる道路に当たり、古代の下総国府の実態を解明する上で貴重な遺構であることから、埋蔵文化財の保存について再度協議が行われることとなった。協議の結果、県営住宅建替事業の建物工事による影響が及ばない範囲の413m²について、遺構確認面より30cm以上の保護層を山砂の埋設によって確保することで現状保存を行うこととなった。協議に基づき、平成29年4月27日と6月16日に山砂による埋戻しを実施して遺構の保存を行った。

発掘調査・整理作業に関わる各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

平成28年度 発掘調査

教育振興部文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 田井知二

担当者 主任上席文化財主事 落合章雄

期間 平成28年11月15日～平成29年3月10日

内容 確認調査面積 上層3,051m² 下層16m²（調査対象面積3,051m²）

平成29年度 発掘調査

教育振興部文化財課長 萩原基一 発掘調査班長 山田貴久

担当者 主任上席文化財主事 落合章雄 文化財主事 垣中健志

期間 平成29年4月14日～平成29年6月16日

内容 確認調査面積 上層3,825m²（調査対象面積3,825m²） 下層36m²（調査対象面積3,412m²）

本調査面積 上層795m²

現状保存範囲 413m²

平成30年度 整理作業

教育振興部文化財課長 古泉弘志 発掘調査班長 山田貴久

担当者 文化財主事 垣中健志

内容 記録整理から報告書刊行



第1図 遺跡の位置と周辺の地形図

- 第192地点
- 平成28・29年度調査範囲

0 400m (1:5,000)



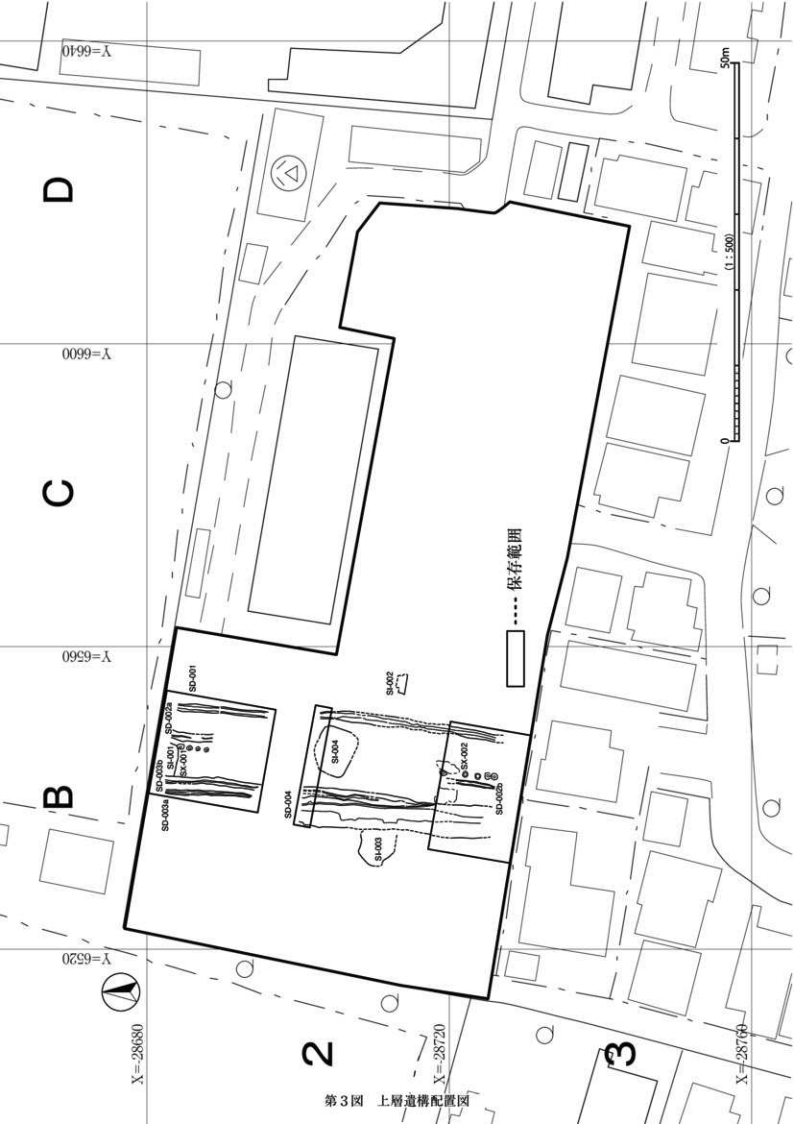
第2図 グリッド配置図

2 調査の方法と概要 (第2図～第4図)

発掘調査に当たっては、調査区全体を覆うように公共座標に基づくグリッド設定を行った。X=-28,680、Y=6,520を基点とし、40m×40mの方眼網を設定して大グリッドとした。名称は北から南へ1・2・3…、西から東へA・B・C…とした。大グリッドは更に4m×4mの小グリッドに100分割し、北西隅を00、南東隅を99とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて2B-67のように呼称した。

上層の確認調査は、旧県管住宅等の基礎撤去工事に合わせ、調査可能範囲ごとすべての範囲を対象として実施し、遺構が検出された範囲の本調査を行った。下層の確認調査は、上層の本調査終了後、調査対象範囲3,825㎡のうち保存協議範囲413㎡を除いた3,412㎡を調査対象として実施したが、住宅基礎等の擾乱によってローム層の遺存する地点が少なく、石器が1点出土したのみであったため確認調査で終了した。記録作成は平板測量による平面図を作成し、遺構断面図については手実測により行った。写真撮影はデジタルカメラ (RAW・JPEGデータ) とともに、6×7カラーリバーサル・モノクロ、35mmカラーリバーサルフィルムカメラにより実施した。調査終了後、調査区内を重機で埋め戻すとともに奈良・平安時代道路跡と溝の上については、山砂を用いて埋め戻し、現場作業を終えた。

検出した遺構は、堅穴住居跡はSI、道路はSF、溝はSD、道路上に南北にわたって連続するピット群はSXの記号を付し、種類記号ごとに3桁の通し番号と合わせてSI-001のように遺構番号として表記した。遺物は各遺構ごとに通し番号を付け、旧石器時代の遺物は出土位置を記録して取り上げた。帰属遺構が不明確なものについては小グリッド単位で一括して取り上げた。報告書作成に当たり、調査区北側の道路に伴う溝状遺構をSD-002a、南側の溝状遺構をSD-002b、調査区北側の道路中央で検出した連続するピット群をSX-001、南側の連続するピット群をSX-002、道路の西側で検出した2条の溝のうち、西側の溝をSD-003a、東側の溝をSD-003bとして新たな遺構番号を付与した。なお、調査の過程で見つかった陸軍に關係する兵舎の基礎等については、図面作成、写真撮影を行った。詳細については全体の様相が判明し



Y=6640

D

Y=6600

C

Y=6560

B

Y=6520



X=28680

2

X=28720

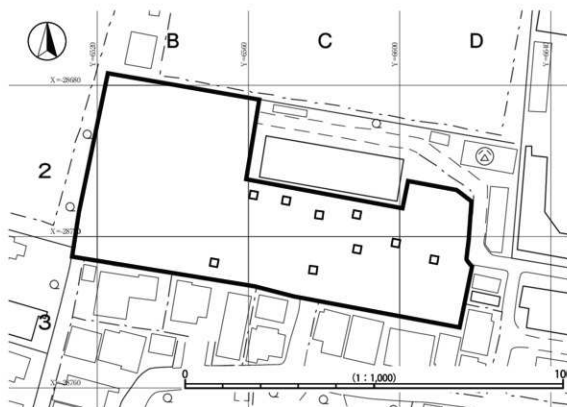
3

X=28760

保存範囲

50m
1:500

第3図 上層道構配置図



第4図 下層グリッド配置図

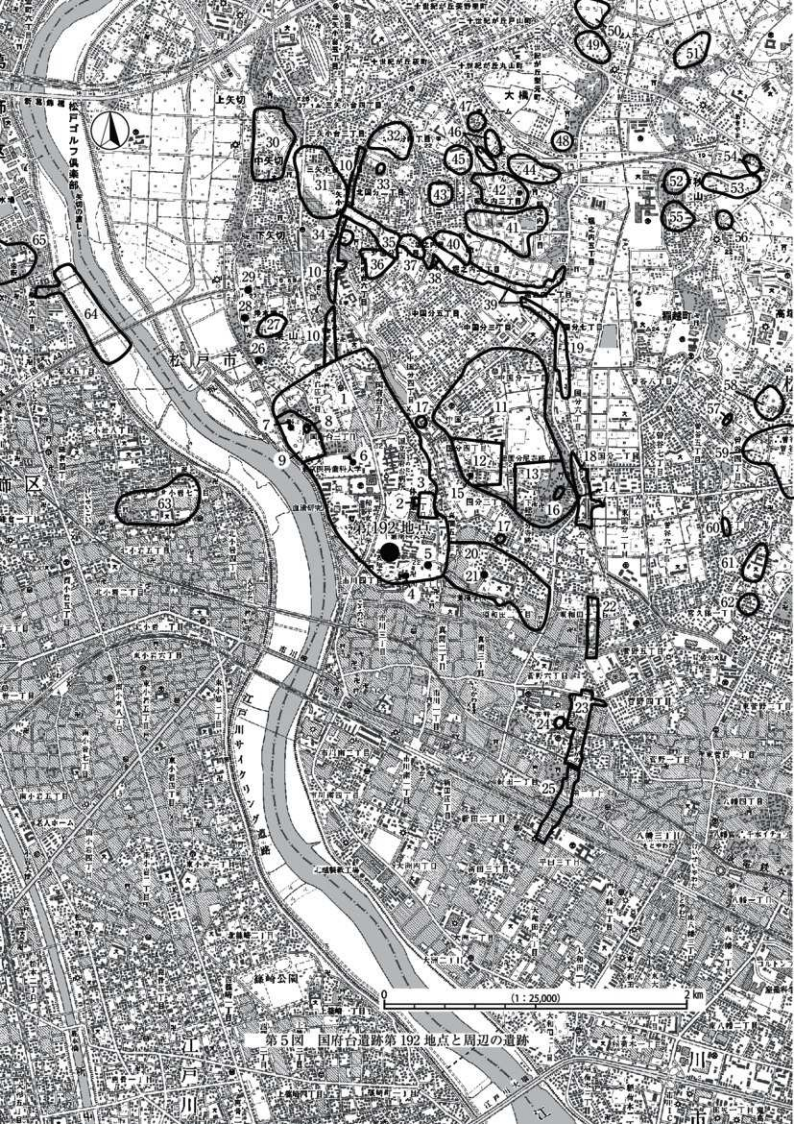
た後に報告を予定している。

整理作業については、遺物は水洗と注記を行った後、分類して接合と実測を行った。並行して調査図面・写真の記録整理を進め、現場図面の修正を行い、トレース原図を作成した。また、写真図版候補写真を選出し、仮レイアウトを行った。その後、デジタル編集によって遺構・遺物の図面をトレースして挿図を作成し、写真原版の補正を行い、写真図版を作成した。その後、原稿を執筆し、原稿・挿図・写真図版をデジタル編集によってレイアウトし、編集・校正作業を経て、報告書を刊行した。なお、編集作業に併せて報告書に基づいた収納整理作業を行った。

なお、本報告書では「国府」を、律令制下の諸国に設置された国庁などの様々な役所や施設を含む語とし、国庁をはじめ、国司館や軍団関係施設・学校・市・国府の諸施設で使役される番丁や工人の宿舍などの施設が所在する範囲を「国府域」と称する。「国庁」は国府の中枢施設である政庁を表し、「国衙」は国庁及びその周辺に設けられた国の事務や維持・管理・運営に携わる曹司群を指す語とする。

第2節 遺跡の位置と歴史的環境⁽¹⁾ (第5図・第1表)

国府台遺跡は市川市北西部の江戸川左岸の標高約20mから25mの台地上に位置する。この地は下総台地と呼ばれる洪積台地の南西端に当たり、西側の東京低地との境は急な斜面となっている。台地の南西部の縁辺には多くの小谷が入り込み、樹枝状の切込みを持つ舌状台地が連なっている。そのうち、市川市域の下総台地で最も西側にあるのが国分台である。国分台は西を江戸川、南を真間川、東を国分川によって区切られており、支谷によってさらに台地を分けることができる。台地奥部まで細長く入り込む六反田支谷によって、東側が中国分支台、西側が国府台支台に分けられる。中国分支台の先端部には下総国分寺・



第5図 国府台遺跡第192地点と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	時期
1	国府台遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
2	下総神社跡	古墳・奈良・平安
3	市営総合運動場内遺跡	奈良・平安
4	弘法寺古墳	古墳
5	真間山古墳	古墳
6	法皇塚古墳	古墳
7	明戸古墳	古墳
8	里見公園内遺跡	奈良・平安
9	国府台城跡	中世
10	新山遺跡	旧石器・奈良・平安
11	下総国分遺跡	縄文・奈良・平安
12	下総国分尼寺跡	奈良・平安
13	下総国分寺跡	奈良・平安
14	下総国分寺東瓦葺跡	奈良・平安
15	(伝)下総国分寺西瓦葺跡	奈良・平安
16	国分平川遺跡	縄文・奈良・平安
17	不入斗遺跡	奈良・平安・中世
18	北下遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世
19	雷下遺跡	縄文・古墳
20	須和田遺跡	弥生・古墳・奈良・平安
21	太鼓塚古墳	古墳
22	後通遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世
23	菅野遺跡	古墳・奈良・平安・中世
24	日出学園遺跡	弥生
25	平田遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
26	丸山遺跡	旧石器・古墳
27	天神山遺跡	平安
28	栗山古墳群	古墳
29	立出し遺跡	縄文・弥生・古墳
30	上矢切南台遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安
31	下矢切東台遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安
32	作兵衛台遺跡	縄文・奈良・平安
33	横塚遺跡	奈良・平安

34	愛宕遺跡	奈良・平安
35	稲荷作遺跡	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世
36	鉄砲塚	縄文・奈良・平安
37	小塚山遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
38	国分下台遺跡	縄文・古墳
39	道免き谷津遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世
40	堀之内貝塚	旧石器・縄文・中世
41	梅原遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安
42	八反割A遺跡	縄文・奈良・平安
43	八反割B遺跡	縄文・奈良・平安
44	彦八山遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・中世・近世
45	東山作遺跡	縄文・奈良・平安
46	大橋向山遺跡	縄文・奈良・平安
47	丸山遺跡	古墳
48	南台遺跡	縄文・古墳
49	白鷺遺跡	旧石器・縄文・弥生
50	諏訪原遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・平安
51	新田前遺跡	縄文・古墳
52	秋山上宿遺跡	縄文・古墳
53	牧之内遺跡	旧石器・縄文・古墳
54	前原II遺跡	縄文・弥生
55	稲無込遺跡	古墳
56	堀込遺跡	縄文・古墳
57	東山王東遺跡	縄文・奈良・平安
58	池ノ台遺跡	縄文・古墳
59	曾谷貝塚	縄文
60	曾谷城跡	中世
61	三中校室内遺跡	縄文・古墳
62	宮久保B遺跡	弥生
63	上小岩遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
64	柴又河川敷遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
65	柴又帝釈天遺跡	奈良・平安・中世・近世

国分尼寺が立地し、国府台支台には推定下総国府跡を含む国府台遺跡が立地する。なお、本報告書では国府台支台のことを指す場合、便宜的に国府台と呼称する。

国府台支台南側には真間川が東西に流れて江戸川に合流している。縄文海進によって台地南側付近まで奥東京湾が入り込み、その後の海退に伴って現在の市川から船橋付近にかけて東南東-西北西方向に市川砂州と呼ばれる自然堤防が形成された。この砂州によって台地との間に入り江が残され、奈良時代には「万葉集」にも詠われた「真間の入江」の景観が広がっていたと考えられている。

続いて、国府台遺跡周辺の主な遺跡と、国府台遺跡の調査成果を時代ごとに概観する。第5図には、国府台遺跡周辺にある主に弥生時代以降の遺構・遺物が確認されている遺跡を中心に位置を示し、旧石器時代、縄文時代の遺跡については、主な遺跡を示した。

旧石器時代の遺跡として、丸山遺跡(26)、新山遺跡(10)が挙げられる。江戸川を望む河岸段丘上にある丸山遺跡からはナイフ形石器・石核などが出土している。六反田支谷の最奥部にある新山遺跡からはナイフ形石器・削器などが層階下部からⅩA層にかけて剥片とともに出土している。

縄文時代の国府台遺跡周辺では、国史跡に指定されている堀之内貝塚（40）や曾谷貝塚（59）、縄文時代早期の丸木舟が出土した雷下遺跡（19）などが所在する。

弥生時代の市川市内の遺跡では、中期の標式土器である須和田式土器で知られる須和田遺跡（20）が知られる。国府台遺跡第29地点からも須和田式土器が少量出土している。中期後葉と後期前葉に国府台遺跡と須和田遺跡で環濠集落が展開する。さらに、国分台の北西に位置する松戸市上矢切南台遺跡（30）では弥生時代後期末から古墳時代初頭の堅穴住居跡を検出し、六反田支谷の最奥部に面する市川市小塚山遺跡（37）でも同時期の堅穴住居跡を検出した。国分台の北東部にある松戸市彦八山遺跡（44）では後期前葉から中葉と後期末の堅穴住居跡と土器が検出されている。さらに北では松戸市諏訪原遺跡（50）が弥生末から古墳時代前期の集落遺跡として知られる。また、国分谷を挟んだ対岸にある曾谷台南端に位置する宮久保B遺跡（62）でも後期末から古墳時代前期の遺物が見ついている。一方、低地の市川砂州上では日出国園遺跡（24）や平田遺跡（25）で弥生時代後期の遺物が出土していることから、弥生時代後期以降、低地にも活動領域を広げていたと考えられる。

古墳時代では、国府台から真間にかけて国府台古墳群が存在し、北の松戸市栗山古墳群（28）まで広がる。市川市内最大の古墳は6世紀中葉に築かれた前方後円墳の法皇塚古墳（6）で、武器や馬具など豪華な副葬品が見ついている。国府台遺跡第29地点では複数の円墳の周溝と見られる遺構と埴輪片が見つかり、6世紀後半から7世紀初頭にかけての群集墳であったと考えられている。

奈良・平安時代については、国府台遺跡の調査成果と須和田遺跡、古代道路遺構に関する遺跡については総括で触れることとし、ここではそれ以外の周辺の遺跡を紹介する。

国府台支台の東側にある中国分支台には下総国分寺・国分尼寺が立地する。台地の東側の斜面には下総国分寺東瓦窯跡（14）や北下遺跡（18）といった、国分寺・国分尼寺の瓦を焼いた瓦窯跡や梵鐘鋳造遺構が確認されている。国分川に面した低地の遺跡でもある北下遺跡（18）は、墨書土器や人名が刻書された白木弓などが出土し、国府城の東の境界における水辺祭祀の場であったと考えられている。「館」の墨書土器が出土し、国府に関係する水場機能を備えていた後通遺跡（22）や、平安時代の堅穴住居跡が検出され、駅路との関わりが想定される平田遺跡（25）も含め、近年の調査で国府関連遺跡が国分川周辺の低地や市川砂州まで展開していたことが明らかになっている。さらに、江戸川対岸の東京低地でも微高地上に位置する江戸川区上小岩遺跡（63）や葛飾区柴又河川敷遺跡（64）、柴又帝釈天遺跡（65）から奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されていることから、「下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」にある嶋俣里・甲和里・仲村里といった集落が展開していたと考えられる。

中世では里見公園から北側の台地全域に国府台城（9）が築かれる。里見氏と後北条氏が争った国府台合戦の戦場としても著名であり、土塁や空堀などが遺存している。天正18年（1590）の徳川家康の江戸入部によって、国府台城は廃城となり、総寧寺が移された。近世以降は弘法寺や総寧寺、六所神社などの寺社地以外は、小規模な集落と畑地が広がっていた。近代以降は明治8年（1875）に大学用地として、現在の和洋女子大学や千葉商科大学などの校地一帯が国に買い上げられたが、その後陸軍の軍用地となり終戦を迎え、戦後国府台官営住宅が建設され、現在に至る。

注1）各遺跡の調査成果については、第3章総括の注1）の文献を参照した。また、本文中の括弧番号は第5図及び第1表の番号と対応する。

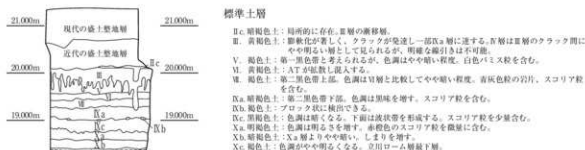
第2章 調査の成果

第1節 旧石器時代・縄文時代

1 旧石器時代（第6・7・8図、図版2・8）

第6図は国府台遺跡第192地点の標準土層である。現代の盛土整地層とした層は、レンガや瓦、砕石が少量に混入する。戦後の県管住宅建設に伴い形成された。近代の盛土整地層とした層は、黒色土でローム粒の混入が極めて少ない。明治時代に陸軍教導団の兵舎が建設される際に、立川ローム層Ⅲ層直上まで掘削し、黒色土で整地したと考えられる。整地に使われた大量の黒色土はどこからの客土であるのかは不明である。

Ⅲ層以下の層序はⅢ層ソフトローム層の直下に第一黒色帯であるV層が位置し、第二黒色帯の間層であるⅩb層がブロック状に認められるといった下総台地の平均的な堆積状況を示し、武蔵野ローム層を確認するには至らなかったが立川ローム層の層厚は18m程と考えられる。

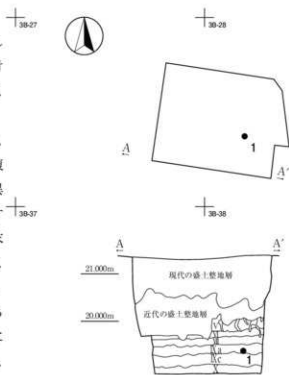


第6図 国府台遺跡第192地点標準土層

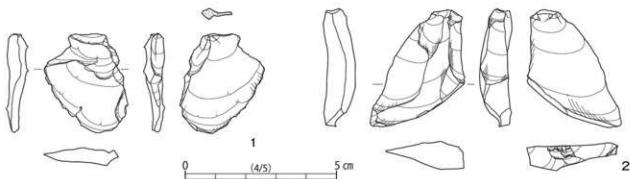
下層確認調査時に3B-28 グリッドから石器が出土した。出土層位はⅩa層とⅩc層の境界付近である。付近は掘削が著しく、掘削範囲を拡張することができず、1点のみの出土にとどまった。

1は玉髓（メノウ）製の剥片である。縦長剥片で、打面は原稜面である。背面を構成する剥離の方向は腹面側の剥離の方向と同一であり、背面右側縁に一部異なる方向からの剥離が存在するが、同一方向に存在する打面から連続して作出された剥片と考えられる。末端部はややヒンジ・フラクチュアとなる。長さ3.27cm、幅2.87cm、最大厚0.70cmを測り、重量は4.46gである。

2は掘削層からの出土である。可視的な観察によると、透明度の高い信州産黒曜石製の剥片で、末端部に腹面側からの微細な剥離痕が認められる。長さ3.92cm、幅2.25cm、最大厚0.91cmを測り、重量は9.15gである。



第7図 石器出土地点と土層



第8図 旧石器時代石器

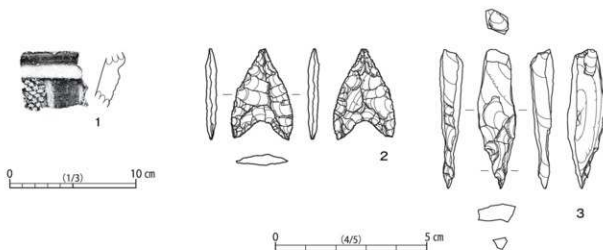
2 縄文時代（第9図、図版8）

縄文時代の遺物として、土器と石器が出土したが、明確な遺構に伴う遺物はなかった。そのうち、土器1点と石器2点を図示した。

1は深鉢の胴部または頭部の破片で、加曾利EⅡ式である。隆帯を貼り付け、縦方向に沈線を2条施し、複節縄文LRLを縦方向に施文後、沈線間を磨り消している。胎土に砂粒やガラス粒を多量に含む。

2はチャート製の石鏃である。凹基無茎で全面に調整が施される。長さ3.02cm、幅2.01cm、最大厚0.38cmを測り、重量は2.06gである。

3は玉髓（メノウ）製の調整痕の認められる剝片である。横長剝片を素材とし、調整は片側縁から末端部にかけて施され、特に片側縁に対しての調整は密に行われる。この部位の断面形状が四角形を呈することから石鏃の作出を意図しているものと考えられる。長さ4.60cm、幅1.22cm、最大厚0.75cmを測り、重量は4.28gである。



第9図 縄文時代遺物

第2節 弥生時代・古墳時代

弥生時代後期後葉から末葉と考えられる竪穴住居跡4軒を検出した。SI-004が全体の8割、SI-003が全体の6割程度の検出にとどまり、SI-001とSI-002は周囲の攪乱等の影響で部分的な検出にとどまった。

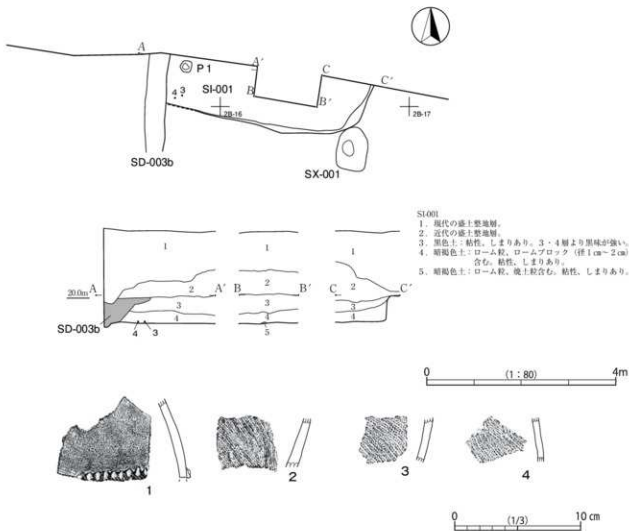
また、調査区内では古墳時代前期の土師器と埴輪片が出土した。遺構に伴わない遺物が大半だが、SI-001から出土した土器があることから、弥生時代後期末葉の遺構と密接に関係する可能性を考慮し、一括してここで扱うこととした。

1 竪穴住居跡

SI-001 (第10図、第2表、図版2・3・8)

2B-06グリッド周辺に位置する。調査区の北端に当たるため、南東隅のみの検出にとどまった。古代道路跡であるSF-001の路面下での検出であり、本来の深さではない可能性がある。また、西側もSD-003bに削平されていることから、詳細な平面規模は不明である。平面形は隅丸方形と推測され、検出した部分での遺構確認面から床面までの深さは約30cmである。床面は南から北に向かって緩やかに傾斜している。周溝は確認できなかった。ピットは北西寄りに1基を検出し、直径24cm、深さ53cmである。

遺物は弥生土器が35点出土した。図示した遺物はいずれも小片で、甕あるいは壺の一部と考えられる。1～3は胴部片である。1の下部は輪積み痕の部分で欠損している。外面下端に単節縄文LRを横方向に



第10図 SI-001

施した後、その上から縄の原体で押しし、刻みを入れる。後期後葉の南関東系土器と北関東系土器の折衷形の甕胴部片と考えられる。2は外面に単節縄文LRを施す。3は外面に付加条縄文を施す。4は肩部片で、外面に撚糸文Lを施す。

遺物の点数が少なく破片のみであることから、SI-001の詳細な時期は不明だが、弥生時代後期後葉から末葉と考えられる。

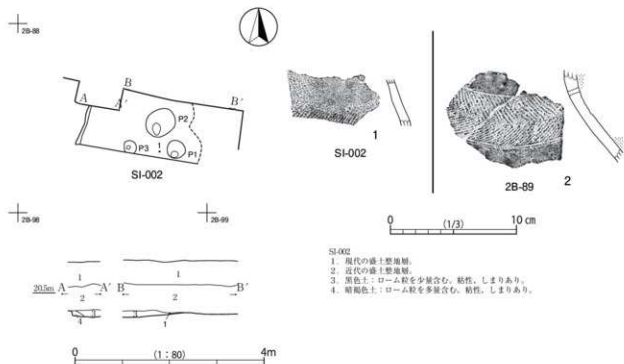
SI-002 (第11図、第2表、図版2・8)

SI-004の南東、2B-88グリッドに位置する。周囲に近代以降の攪乱が深く入り込み、一部分のみの検出にとどまったため、詳細な規模は不明である。検出した部分での遺構確認面から床面までの深さは約16cmである。床面は平坦で、周溝は確認できなかった。中心部に深さ20cmのピットを3基確認した。P1は直径38cm、P2は直径64cm、P3は全体の90%程度を検出、直径24cmである。

遺物の出土はほとんどなく、実測した個体以外ではP1から出土した土器が1点のみである。また、2B-88グリッドで出土した遺物1点と2B-89グリッドで出土した遺物4点は弥生時代土器小片であり、近代以降の攪乱によって原位置をとどめていないと考えられるものの、SI-002に伴っていた可能性があると推測されるため、参考資料としてここで報告する。

1は壺の肩部片である。外面下部に単節縄文LRを施し、S字状結節縄文で区画する。無文帯はナデ調整。器面がやや荒れて摩耗気味で、S字状結節縄文が判別しにくい。2B-89グリッドで出土した2は甕の頸部から胴部にかけての破片である。頸部の内面はミガキ調整されている。頸部断面に補修孔が残る。外面は頸部1条、胴部2条の沈線で区画を作り、区画内にRのS字状結節縄文で結んだ単節縄文RL、LRの原体を用いて羽状縄文を施す。無文帯には赤彩を施す。弥生時代後期後葉の南関東系土器の特徴を持つ。

遺物の点数が少なく、遺構も一部分のみの検出にとどまっていることから、SI-002の詳細な時期は不明だが、弥生時代後期後葉と考えられる。

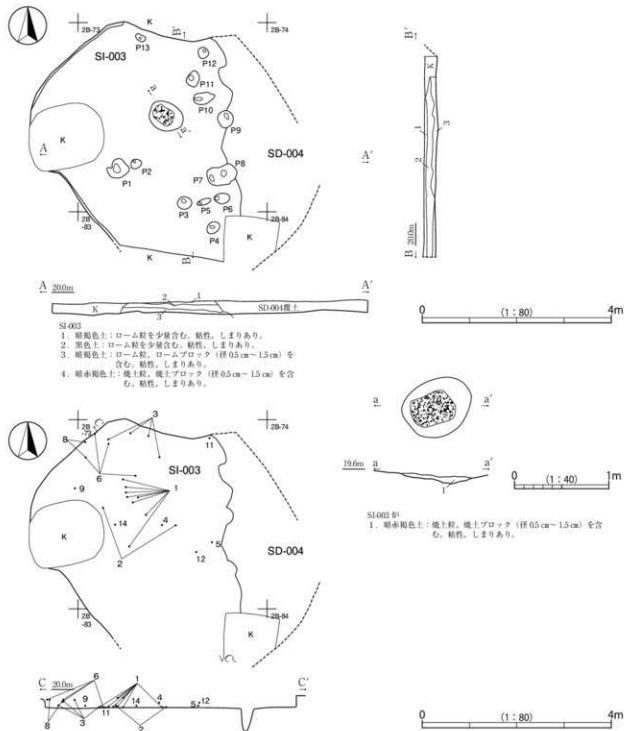


SI-002
 1. 現代の漆土器片。
 2. 近代の漆土器片。
 3. 黒色土：ローム粒を少量含む、粘性、しまりあり。
 4. 暗褐色土：ローム粒を多量含む、粘性、しまりあり。

第11図 SI-002

SI-003 (第12～14図、第2表、図版3・8)

2B-72・73・74・83・84グリッドにまたがって所在する。東側をSD-004に、南側と北側は近代以降の深い攪乱によって削平されていたため、全体の6割程度の検出にとどまり、詳細な規模は不明である。平面形は隅丸方形と推測され、検出された部分での遺構確認面から床面までの深さは約18cmである。床面は西から中央に向かって緩やかに傾斜しており、周溝は確認できなかった。ピットは全部で13基検出し、深さ約20cm～50cm程度であるが、P1が深さ72cm、P12が深さ70cmとなる。炉は中央やや北西寄りに設けられ、規模は長軸72cm、短軸64cm、深さ17cmの楕円形である。

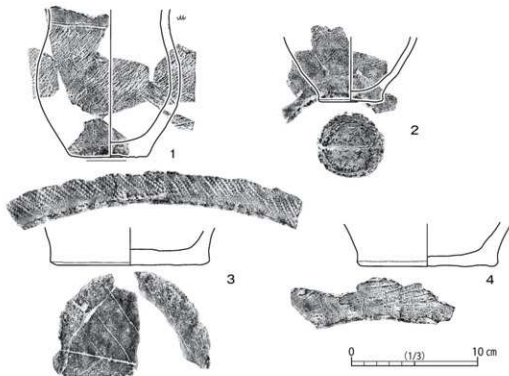


第12図 SI-003 (1)

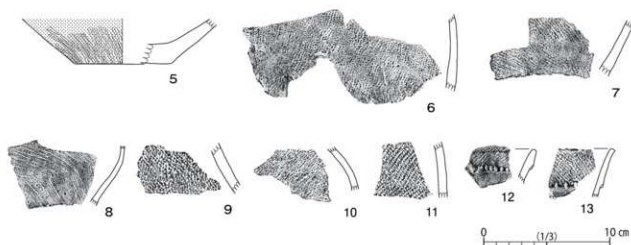
遺物は弥生土器・石器が出土するとともに、須恵器・土師器も出土した。完形の土器は出土せず、甕や壺の破片が多数を占める。遺物の出土位置は、炬の周囲が最も多く、次いで北西の佃壁付近が多い。ほとんどが弥生時代後期後葉から末葉の土器と考えられる。

1は炬の周囲の破片を中心に接合した胴部から底部にかけて遺存する小型甕である。外面は胴部上端に粗い沈線を2条施し、胴部下端にかけて単節縄文LRを施す。胴部下端はヘラナデ調整を施し、底部には木葉痕が、内面には胴部下端と底面に種子圧痕が見られる。2は壺の底部と考えられる。外面は胴部下端まで付加条縄文を施し、胴部下端際はヘラナデ調整を施す。底部には木葉痕が見られる。胎土に粒の大きい白色粒を多量に含む。3～5は甕の胴部下端から底部である。3は外面胴部下端に単節縄文RLを施し、胴部下端際に横ヘラナデ調整を施す。底部には木葉痕が見られる。胎土に粒の大きい白色粒を多量に含む。4は外面胴部下端に燃糸文Rを施し、胴部下端際はヘラナデ調整を施す。底部に木葉痕が見られる。胎土に粒の大きい白色粒を多量に含む。5は胴部外面にミガキと赤彩を施し、内面には横ヘラナデ調整を施す。胎土に白色粒と雲母粒を多量に含む。6は甕の胴部片と考えられる。外面に単節縄文LRを施し、内面にヘラナデ調整を施す。7～11は壺・甕類の胴部片である。7は外面に燃糸文Lを、内面に縦方向のヘラミガキを施す。胎土に多量の粒の大きい白色粒と少量の赤色粒を含む。8・9は外面に燃糸文Lを施す。内面はススが付着し、器面は摩耗している。10は外面に無節縄文Lを施し、内面に横ヘラナデ調整を施す。11は外面に単節縄文LRを施す。胎土に粒の大きな白色粒を多量に含む。12・13は口縁部片である。12は外面に単節縄文LRを横方向に口縁まで施し、下端を上から単節縄文LRの縄の原体で押押し、刻みを入れる。刻みの下はナデ調整を施す。13は外面に燃糸文Lを口縁まで施し、下端に段を作り、工具により刻む。胎土に白色粒を多量に含む。

柱穴位置が不明瞭になることや出土遺物などから、SI-003の時期は弥生時代後期末葉と考えられる。



第13図 SI-003 (2)



第14図 SI-003 (3)

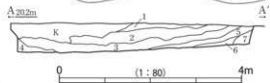
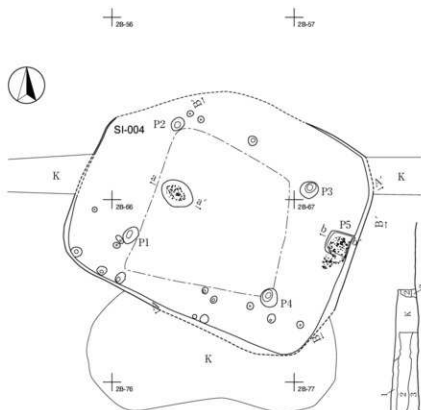
SI-004 (第15・16図、第2表、図版4・9)

2B-56・57・66・67に位置する。北西隅が近代以降の擾乱によって消滅し、北東、南東隅も上端は擾乱によって削平されているため、詳細な規模は不明である。平面形は隅丸方形とみられ、主軸方位はN-70°-W、規模は主軸長6.08 m、幅5.12 m、遺構確認面から床面までの深さは約37 cmである。P1～P4が主柱穴であり、主柱穴の内側に硬化面が広がり、P1とP2の間に炬が設けられる。炬は中央やや西寄りに設けられ、規模は長軸7.2 cm、短軸4.9 cmの楕円形である。炬の反対側の東壁寄りに深さ16 cmの入口施設P5があり、覆土上面に焼土が散る。南壁面には側柱穴とみられる柱穴が5本あり、深さは4 cm～33 cmである。

遺物は弥生土器が多数を占め、石器も1点出土した。SI-003と比べると、遺物の量は少ない。完形の土器は出土せず、甕・壺類の破片が多数を占める。入口施設付近と西側壁から多くの遺物が出土した。土器の施文に用いられる原体が細密であることから、弥生時代後期後葉から末葉の土器と考えられる。

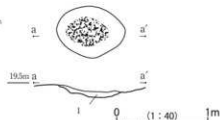
1～3は甕の一部である。1は口縁部から頸部にかけて遺存する。外面は口縁部に単節縄文LRを施し、下端を工具による刻みで区画する。刻みより下部は無文でヘラナデ調整を施す。その下から単節縄文LRを施す。2は口縁部の一部が遺存する。口唇部に単節縄文RLを施す。口縁部に輪積み痕による段が3段見られ、上から3段目に工具で刻みを入れる。刻みより下は無文で、横ヘラナデ調整を施す。後期後葉の所産と考えられる。3は頸部から胴部にかけての一部が遺存する。外面は単節縄文RLを施文後、頸部上半にヘラナデ調整を施し、縄文をナデ消して無文帯を設ける。4は胴部下端から底部の遺存である。外面の胴部下端に単節縄文RLを一部施し、残りは無文である。底部に木葉痕が残る。胎土に粒の大きい白色粒を多量に含む。5～9は胴部片である。5は外面に横ハケ・斜ハケ調整を施す。胎土に粒の大きい白色粒を多量に含む。焼成がやや不良である。6は外面に燃糸文Lを施す。7・8は外面に単節縄文RLを施す。9は外面に燃糸文Rを施し、内面は横ヘラナデ調整を施す。胎土に粒のやや大きい白色粒と微小な雲母粒を多量に含む。10、11は口縁部片である。10は外面の口唇部から口縁部にかけて単節縄文LRを施し、その下に2段の段を設け、それぞれ工具で刻む。11は外面の口唇部から口縁部全面に燃糸文Lを施文後、その上から下端を工具で刻む。12は砂岩製の砥石である。破損し一部のみ遺存する。長さ7.4 cm、幅5.0 cm、厚さ1.6 cm、重さ81.9 gである。扁平礫を使用し、よく研磨され器表面は平滑である。

出土した土器の時期からSI-004は弥生時代後期後葉から末葉であると考えられる。



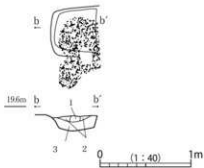
SI-004

1. 黒色土：ローム粒を少量含む。粘性、しまりあり。
2. 黒色土：ローム粒を多量含む。粘性、しまりあり。
3. 暗褐色土：ローム粒を多量含む。粘性、しまりあり。
4. 暗褐色土：ローム粒を多量含む。粘性、しまりあり。
5. 黒褐色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm~2cm）を含む。粘性、しまりあり。
6. 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm~3cm）を含む。粘性、しまりあり。
7. 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm~2cm）を多量含む。粘性、しまりあり。
8. 黒色土：ローム粒を少量含む。粘性、しまりあり。
9. 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm~3cm）を含む。粘性、しまりあり。
10. 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm~4cm）を多量含む。粘性、しまりあり。



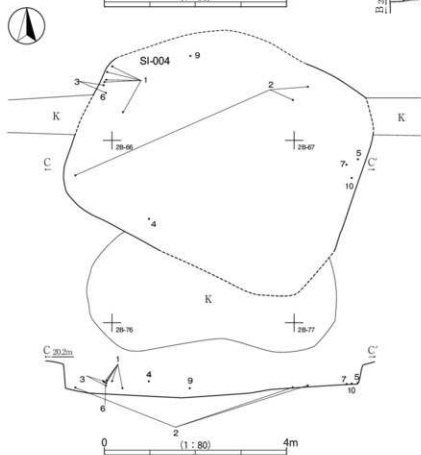
SI-004 6'

1. 暗赤褐色土：焼土粒を多量含む。粘性強、しまりあり。

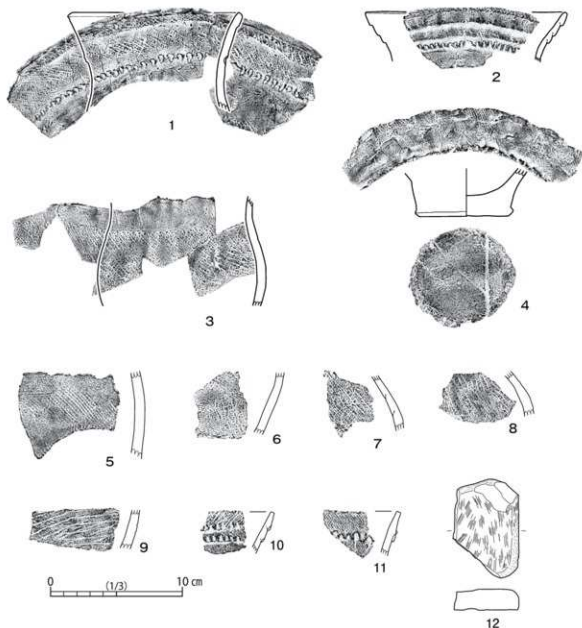


SI-004 入口施設

1. 黒色土：焼土粒を含む。粘性、しまりなし。
2. 暗褐色土：焼土粒、ローム粒を少量含む。粘性、しまりあり。
3. 暗褐色土：ローム粒を含む。粘性、しまりあり。



第15図 SI-004 (1)



第16図 SI-004 (2)

2 グリッド等出土遺物

弥生時代遺物 (第17図、第2表、図版9)

1・2は胴部下半から底部の一部である。底面に木葉痕が見られ、内面にススが附着する。1は胴部外面に単節縄文RLを施す。後期後葉の北関東系土器の甕と考えられる。2は胴部外面に燃糸文Rを施す。3は底部のみで、外面に木葉痕、内面に圧痕がみられる。外面下端に一部単節縄文RL、1条のみ燃糸文Lを施す。4・5は肩部片で、南関東系の土器で後期前葉の所産と考えられる。4は壺で、外面上端に単節縄文LRを施し、沈線で区画する。沈線より下部は無文で、縦・斜ハケ調整を施す。5は外面全体と内面の一部に赤彩を施す。外面は付加条縄文を施文後、上部に横ヘラナデ調整を施して縄文をナデ消し、無文帯を設ける。6～13は胴部片である。6は外面上端にRのS字状結節縄文を2本施し、その上下に無文帯を設け、横ヘラナデ調整を施す。S字状結節縄文下部の無文帯の下から燃糸文Rを施す。7は外面に

燃糸文Lを施し、内面は横ヘラナデ後、斜ヘラナデ施す丁寧な仕上がりに。8・9は外面に燃糸文Rを施す。8は内面に横ヘラナデ調整を施す。内面の一部にススが附着する。胎土はやや赤みを帯び、粒の大きい白色粒を多量に含む。9は内面にススが附着し、器面が摩耗している。10～12は外面全体に燃糸文Rを複数回施し、器表面全体に施文する。11はSD-001から出土した。13は外面に付加条縄文を施す。胎土に粒の大きい白色粒を含む。14は外面上端に単節縄文RLを施し、残りの部分は無文帯を設け、横ヘラナデを施す。外面全体に赤彩を施す。南関東系の土器で弥生時代中期後葉から後期前葉の所産と考えられる。15～17は口縁部片である。15は口縁部に2段の段を設け、段を工具で刻んだ後、燃糸文Rを口縁部全体に施す。下段の刻みの下は無文帯で横ヘラナデ調整を施す。16は口縁部に付加条縄文を施し、下端に段を設け、その下は無文帯を設ける。17は口唇部に縦方向の単節縄文LR、口縁部に横方向と縦方向の単節縄文LRを羽状にして施し、段を設け、工具で刻む。刻みの下部より横方向の単節縄文LRを施す。

18は安山岩製の定角式磨裂石斧である。長さ4.7cm、幅5.1cm、厚さ2.7cm、重さ103.5gである。全体によく研磨され、器表には光沢が認められる。刃部には剥落痕等は認められない。

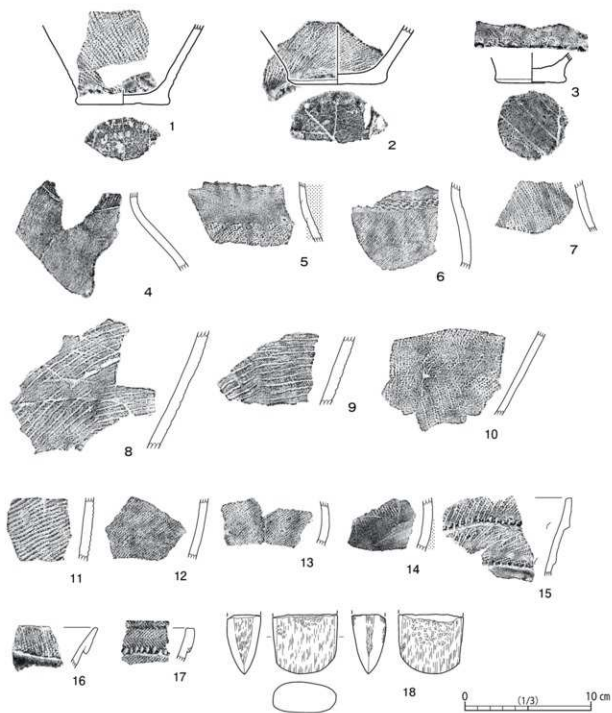
なお、これらの遺物のうち、2・3、7～9、12～18はSD-004から出土した。

古墳時代遺物（第18図、第2表、図版9）

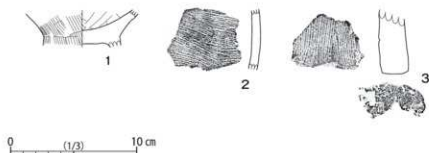
古墳時代の土師器甕類の胴部片がSD-001から2点、SD-003から1点、SI-001から1点、グリッドから9点出土している。いずれも器表面に密にハケ調整を施すことから、古墳時代前期と考えられる。また、調査区内では埴輪片も1点出土した。

1は台付甕の胴部下端から底部の一部が遺存する。器表面には縦ハケ・斜ハケ調整を施す。胎土に白色粒を多量に含む。2はSI-001から出土した。器表面に横ハケ調整を施す。胎土に雲母粒を多量に含む。

3は円筒埴輪の基部片である。器表面に縦ハケ調整を施すが、底部はケズリ調整のみを施す。胎土に白色粒を多量に含むとともに、赤色粒を少量含む。古墳時代後期の所産と考えられる。



第17図 弥生時代グリッド等遺物



第18図 古墳時代グリッド等遺物

第3節 奈良・平安時代以降

調査区の西側に道路跡1条とそれに伴う側溝3条、道路路面部分に溝2条と連続するビット群を検出した。また、道路の側溝を壊して造成された平安時代以降の大溝1条も検出した。遺物は奈良時代後半から平安時代の須恵器、土師器を主体とし、土錘、円盤といった土製品や、瓦、刀子や帯金具といった金属製品が出土した。また、溝の覆土や路面には近世の焙烙や陶磁器といった土器類、土人形や瓦、銭貨が混入していた。なお、道路跡と大溝から出土した中世以降の遺物についても、一括して本節で扱う。また、奈良・平安時代以降の遺構・遺物については、2B-40グリッドから2B-49グリッドのラインを境に、調査区を便宜的に北側調査区と南側調査区に分けて記述する。

1 道路跡・大溝

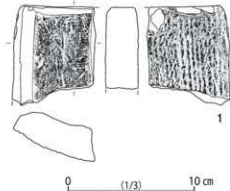
SF-001 (第19・21・22・24図、第6表、図版3～6・12)

2B-05グリッドと2B-07グリッドから、3B-14グリッドと3B-16グリッドの間を南北方向に走る直線道路で、南側調査区では主軸方向がN-10°-Eであるが、北側調査区ではほぼ真北となる。南北約45mにわたって検出したが、2B-45グリッドから2B-47グリッド付近は県管住宅等の基礎の攪乱によって道路の痕跡を確認できなかった。道路の東西に側溝(SD-001・SD-003a・b)を伴う。側溝の芯々距離は、北側調査区のSD-003aとSD-001の間が11.1m、SD-003bとSD-001の間が9.5m、南側調査区のSD-003bとSD-001の間では10.8mである。道路の路面幅は北側調査区で8.6m～8.8m、南側調査区で9mであることから、SD-003bとSD-001が機能していた時期の道路幅は約9m、SD-003aとSD-001が機能していた時期の道路幅は約10mと推定される。

道路造成時に盛土などの地盤改良を実施した痕跡は確認できなかった。また、路面に土や石、土器片等を敷き詰める、路面を構成する土壌に石や木などを混ぜるといった路面舗装の痕跡や、透水性の良い土の搬入といった路面補強の痕跡も確認できなかった。

南側調査区で硬化面を2か所確認した。1つは路面西よりの2B-95グリッドから3B-05グリッドの周辺にかけて、東西約2.1m、南北約2.9mの範囲に及ぶ。もう1つは2B-96グリッドから3B-06グリッド周辺にかけて、東西約1.4m、南北約3mの範囲に及ぶ。

路面上での遺物は少なく小破片がほとんどであったため、図示できたものは古代瓦1点のみであった。



第19図 SF-001 遺物

須恵器、土師器のほか、近世陶磁器と瓦が少量出土した。須恵器は甕類の破片がほとんどで、土師器は杯と甕類の小片からなる。このうち、硬化面からは須恵器9点、土師器28点、瓦2点、近世陶磁器4点が出土した。瓦2点のうち1点が1の古代の平瓦である。狭端部が6cm程度遺存する。狭端部と凹面から見て左側面の一部が遺存する。凹面には布目痕が見られるが、狭端縁と側縁はヘラケズリによって面取りされ、布目が消えている。側縁と左側面はヘラケズリ後、ナデ調整を施す。凸面には縄タキ目が見られるが、狭端縁は欠損がありはっきりとわからない。

SX-001・002 (第21・22・24図、図版4・6)

南北それぞれの調査区で、路面中央部に南北方向に連続する円形のビットを検出した。北側調査区では合計9個のビットを検出し、直径は30cm～90cm、確認面からの深さは10cm～30cmである。南側調

査区では合計5個のピットを検出し、直径は70cm～90cm、確認面からの深さは10cm～20cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土で、粘性があり、しまりは強い。北側調査区の断面形状は碗状に、南側調査区はW字状となる。南北いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

この路面中央部に連続するピットは、以上のような特徴から道路遺構にしばしば見られる波板状凹凸面の可能性が考えられるが、ピットの覆土には透水性の良い土が使用された痕跡や排水の痕跡、掘削工具痕や加圧痕などは確認されず、道路を使用したことによってできたくぼみであると考えられる。

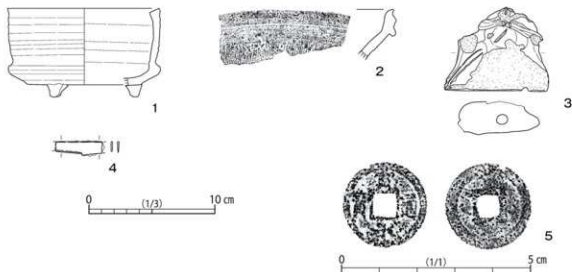
SD-001 (第20～24図、第4・5・7・8、図版3～6・10)

道路の東側溝に当たる。北側調査区ではほぼ南北方向に延びるが、南側調査区ではSF-001と同様に主軸方向がN-10°-Eとなる。全長は北側調査区で11.6m、南側調査区で23.1m、溝の幅は北側調査区で0.8m～1.0m、南側調査区で0.9m～1.4mを測る。溝の立ち上がりは近代の盛土によって攪乱されている部分が多く、東側溝の幅は西側溝の幅も考慮すると約1.0m前後であったと考えられる。確認面からの深さは南北調査区ともに0.4mであった。覆土はローム粒と1mm～2mmのロームブロックを含む暗褐色土が主体である。覆土の堆積状況と溝の断面形状の観察から、確認面からの深さ0.3mで一度掘返しを行い、溝を掘削し直している。

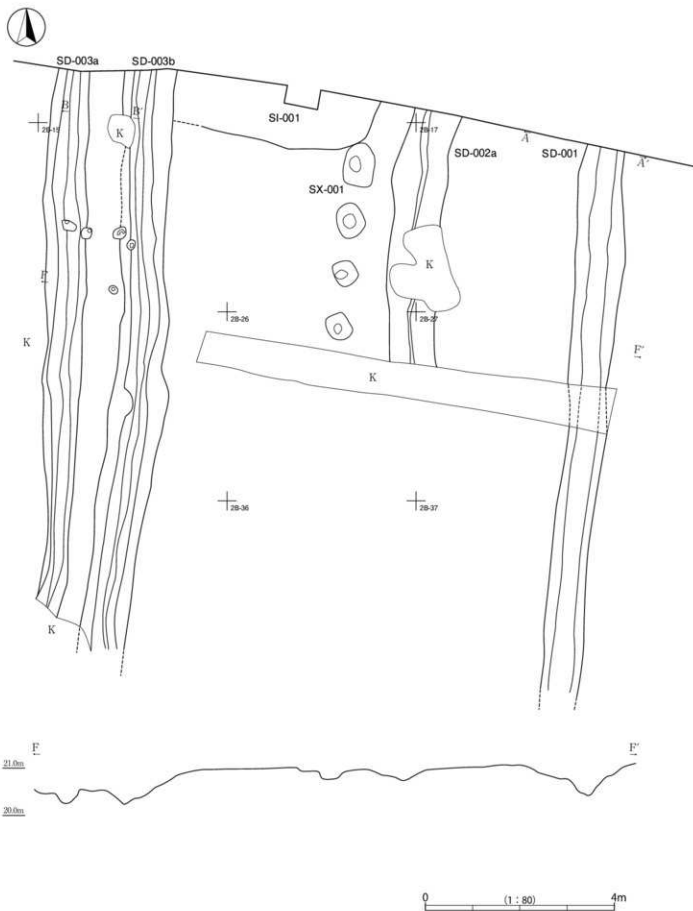
遺物は須恵器、土師器、古代瓦と近世陶磁器、土製品、瓦が出土した。掘返し前の溝の覆土からはほとんど遺物が出土せず、大半の遺物は掘返し後の溝の覆土から出土した。

北側調査区では須恵器3点、土師器46点、焙烙3点、陶磁器23点、瓦13点が出土した。いずれも小片であったため、図示できたのは1の陶器のみである。1は三足香炉で、口縁部から底部にかけて内面と外面に灰釉がかかっているが、底部外面と貼付足は無釉である。瀬戸・美濃産で18世紀前葉から中葉のものである。

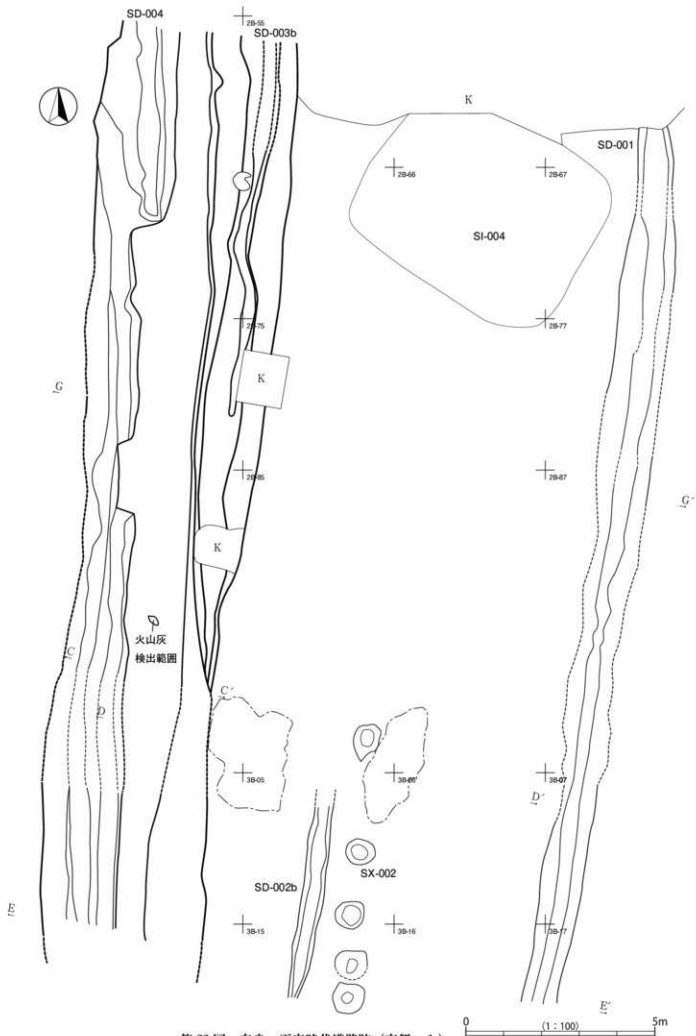
南側調査区では須恵器20点、土師器73点、焙烙3点、陶磁器28点、土製品7点、瓦9点、刀子1点、銭貨1点、焼礫1点が出土した。北側調査区と同様、いずれも小片であったため、図示できたのは4点のみである。2の陶器は丹波産の挿鉢で17世紀中葉のものである。胎土に白色粒を多量含み、内面と外面に灰釉がかかる。3の土製品は顔と腹部前面、腕が欠けている在地産の土人形で、その形状から布袋尊とみられる。4の刀子は唯一図示できた古代の遺物である。鉄製で基部から刃部にかけての破片で、基部幅7mm、刃部幅9mm、重さ2.9gである。5の銭貨は寛永通宝で、新寛永である。



第20図 SD-001 遺物



第 21 図 奈良・平安時代道路跡（北側・1）



第 22 図 奈良・平安時代道路跡 (南側・1)

SD-002 a・b (第21・22・24図、図版3～6)

SD-002aは北側調査区のSX-001のすぐ東隣に位置し、南北方向に延びる。全長は11.6m、幅は0.9m～1.2m、確認面からの深さは0.1m～0.2mである。覆土は暗褐色土で粘性を持ち、しまりがある。遺物の出土はない。

SD-002bは南側調査区のSX-002のすぐ西隣に位置し、南北方向に延びる。規模は全長5.0m、幅0.6m、確認面からの深さ5cmである。覆土はSD-002aと同様である。近世の磁器の破片が1点出土した。

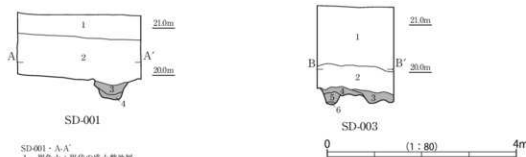
SD-002a・bはいずれも浅く細長い溝で道路使用の痕跡と考えられる波板状凹凸面の近くにあり、SD-002bは硬化面にも近接することから轍と考えられる。

SD-003a・b (第21～24図、図版3～6)

道路の西側溝である。北側調査区では2条、南側調査区では1条確認された。北側調査区のSD-003aは、西側が掘乱によって削平されていたため、元の規模は不明だが、全長11.2m、確認できた溝の幅は0.5m～0.9m、確認面からの深さは0.4mである。SD-003bは全長12.2m、幅0.9m～1.1m、確認面からの深さ0.2mである。南側調査区では、SD-003a・bがSD-004に削平されているため、SD-003bが部分的に残存しているのみであった。遺構を検出できた箇所でのSD-003bの規模は、全長9.9m、幅0.4m～0.5m、確認面からの深さ0.2mである。これらのことから、西側溝の本来の規模は、幅約1m、深さ約0.4m程度と推定できる。

覆土の堆積状況からSD-003aの埋没後、SD-003bが東隣に掘削された。道路側溝としてはSD-003aが古く、SD-003bが新しい。西側溝の付け替えにより、路面幅が縮小したと考えられる。覆土は暗褐色土が主体で、SD-003aの覆土の4層で硬化面を確認した。

出土した古代の遺物は少なく、須恵器4点、土師器23点、古代瓦2点である。いずれも小片のため図示できるものはなかった。須恵器、土師器ともに瓦類の胴部片が多数を占め、須恵器では高盤の脚上部が1点出土した。なお、この他に近世の陶磁器類の小片が多数出土している。



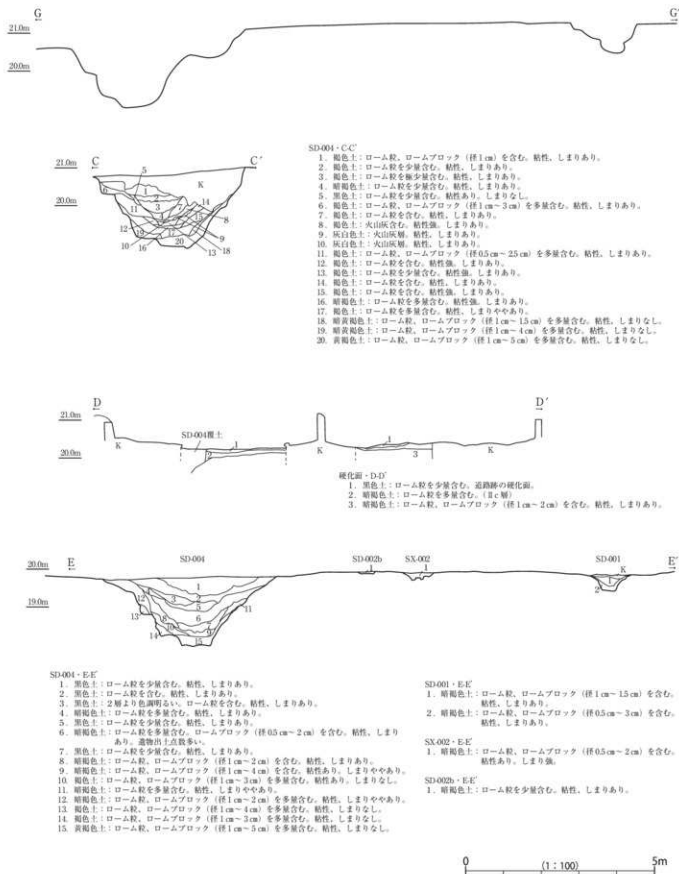
SD-001・A-A'

1. 褐色土：現代の盛土整地層。
2. 黒色土：近代の盛土整地層。
3. 黒色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm～2cm）を含む。粘性、しまりあり。
4. 褐色土：ローム粒、ロームブロック（径2cm）を含む。粘性、しまりあり。

SD-003・B-B'

1. 明褐色土：現代の盛土整地層。
2. 黒色土：近代の盛土整地層。
3. 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm～1.5cm）を含む。粘性、しまりあり。
4. 暗褐色土：ローム粒を少量含む。粘性、しまり強。硬化面あり。
5. 暗褐色土：ローム粒を少量含む。粘性、しまりあり。
6. 暗褐色土：ローム粒、ロームブロック（径1cm～2cm）を多量含む。粘性、しまりあり。

第23図 奈良・平安時代道路跡（北側・2）



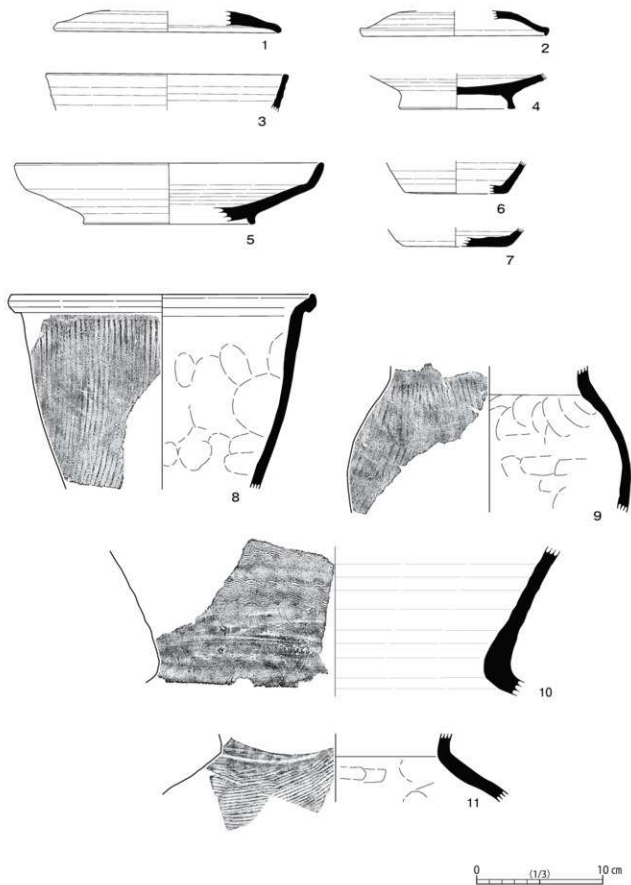
第24図 奈良・平安時代道路跡（南側・2）

SD-004 (第22・24～28図、第4～8表、図版4・7・10～12)

南側調査区で、道路西側溝を断ち切るように南北方向に延びる大溝である。主軸方向はほぼ真北で、規模は全長24.5m、幅4.0m～4.3m、確認面からの深さ1.8m～2.0mである。覆土は暗褐色土、褐色土を主体とする。覆土の堆積状況と溝の断面形状の観察から、確認面からの深さ1.6m～1.8mと1.2m～1.3mで二度の掘返しを行い、溝を掘削し直している。また、C-C'の土層断面で、確認面からの深さ1.0m～1.2mの8層から10層にかけて灰白色の火山灰と軽石を検出した(附章参照)。

遺物は須恵器、土師器、灰軸陶器、緑軸陶器、瓦、土製品、帯金具といった古代の遺物が出土するとともに、近世の陶磁器、瓦、銭貨も出土した。C-C'では4層と8層、E-E'では6層に当たる確認面からの深さ1.0m～1.2mで最も多く遺物が出土し、次いでC-C'では17層、E-E'では9層に当たる確認面からの深さ1.4m～1.6mでも多量の遺物が出土した。確認面からの深さごとに取り上げた遺物の点数は、確認面～0.4mで須恵器8点、土師器7点、瓦2点、陶磁器10点、0.4m～0.8mで須恵器50点、土師器48点、瓦12点、陶磁器34点、0.8m～1.0mで須恵器2点、土師器9点、1.0m～1.2mで須恵器206点、土師器330点、瓦8点、陶磁器37点、1.2m～1.4mで須恵器21点、土師器28点、瓦1点、陶磁器2点、1.4m～1.6mで須恵器184点、土師器190点、瓦2点、陶磁器9点、1.6m～底面で須恵器4点、土師器7点である。このほかに、一括で取り上げている遺物もあるが、全体の出土傾向は変わらない。須恵器は実測個体も含め、完形の遺物はなかった。甕類の破片が多数を占め、新治産を含む常陸産が9割を占め、1割が下総産である。時期は8世紀後葉～9世紀前葉に取まる遺物が多く、一括で取り上げた遺物も含めると約1,000点出土した。土師器は杯・皿類の破片が主体で、甕類破片も多い。黒色処理を施した碗の破片や赤彩を施した坏類の破片も見える。下総産が主体で、時期は9世紀後葉～11世紀初頭に取まる遺物がほとんどだが、一部8世紀後葉から9世紀初頭のものともみられる遺物もあり、一括で取り上げた遺物も含めると約1,100点出土した。緑軸陶器は壺の破片が、灰軸陶器は甕類の破片がそれぞれ1点出土した。

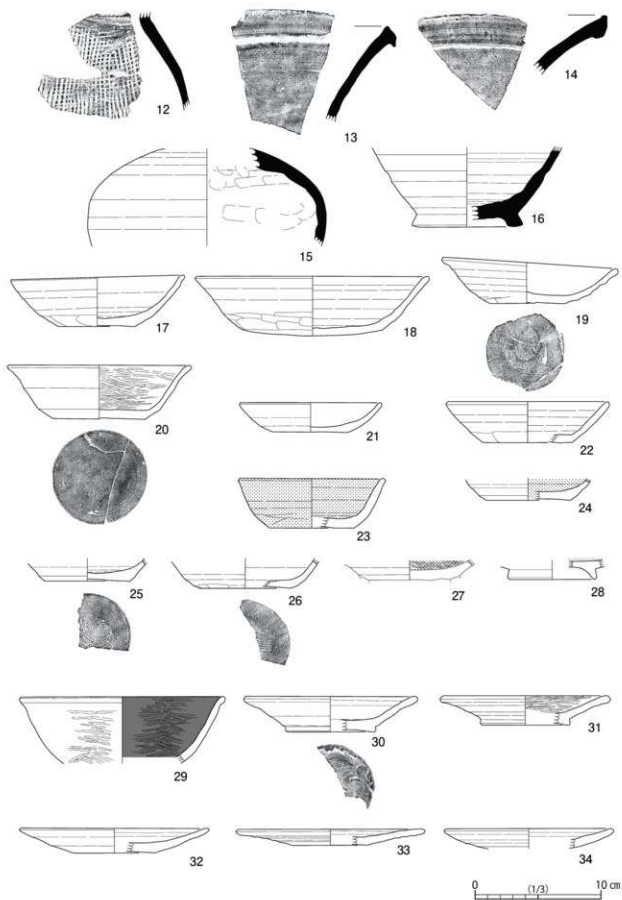
1～16は須恵器である。1・2は蓋で、8世紀中葉の所産で常陸産と考えられる。天井部外面中位に回転ヘラケズリが施され、天井部下位と口縁部、内面はロクロナデ調整である。いずれもつまみが欠ける。1は確認面からの深さ0.4m～0.8mで出土した。3は高台付杯である。胎土に粒の大きい黒色粒を多量に含む。確認面からの深さ1.4m～1.6mで出土した。4・5は高台付盤で、いずれも8世紀中葉の所産と考えられる。確認面からの深さ1.4m～1.6mで出土した。4は転用硯であり、体部内面に墨痕が見られ、器面は平滑である。底部外面には少量の朱墨の痕跡が見られる。常陸産と考えられる。5は高台を後付けし、口縁は外傾気味に立ち上がる。ロクロ目が顕著に残り、器内の芯までしっかりと還元されていない。雲母粒を多量に含むことから、新治産と考えられる。6・7は杯で、8世紀中葉の所産と考えられる。いずれも体部から底部の一部のみの残存である。6は雲母粒を多量に含むことから、新治産と考えられる。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。7は底部を手持ちヘラケズリで調整を施す。常陸産と考えられる。確認面からの深さ1.4m～1.6mで出土した。8～14は甕である。8～12は確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。8・9は9世紀前葉から中葉の所産で、下総産と考えられる。8は口縁部から胴部の一部が遺存する。頸部がなだらかに外傾しながら立ち上がり、口縁は二重口縁である。口縁部は外面、内面ともにロクロナデ調整を施し、胴部外面には平行タキが施され、胴部内面には無文のアテ具痕が見られる。器内の芯までしっかりと還元されておらず、断面は暗赤褐色を呈する。9は頸部から胴部の一部が遺存する。頸部外面にヘラナデ、胴部外面上部には平行タキが施され、下部はさらにヘラケズリ調整を施



第25図 SD-004遺物(1)

す。胴部内面には無文のアテ具痕が見られる。器面に無数のクラックが入り、器内の芯までしっかりと還元されておらず、断面は暗赤褐色を呈す。10は頸部の一部のみ遺存する。頸部外面上部には縞揃き波状文を施す。胎土に大粒の白色粒や小石が多量に含まれる。9世紀前葉の常陸産と考えられる。11は頸部から胴部上半部が遺存する。時期は未詳だが、新治産と考えられる。頸部の外面と内面にはロクロナデ調整を施す。胴部外面には平行タタキが施され、胴部内面には無文のアテ具痕が見られる。胎土に雲母粒を多量に含む。12は胴部片で外面上部にロクロナデ調整を施し、格子目タタキを施す。胎土に雲母粒を多量に含み、大型の半透明粒も含む。13・14は口縁部片である。13は内面全体に自然釉がかかる。胎土に針状物質を多量に含む。8世紀中葉から後葉の所産で南比企産と考えられる。確認面からの深さ1.4m～1.6mで出土した。14は胎土に白色粒が多量に含まれ、小石も少量含まれる。8世紀後葉の所産で常陸産と考えられる。15・16は壺である。15は頸部直下から胴部にかけて遺存する。胎土はわずかに白色粒を含むのみで、比較的精緻である。8世紀中葉から後葉の所産で、常陸産と考えられる。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。16は胴部から底部の一部が遺存する。器面に無数のクラックが入り、しっかりと還元されていないため、灰黄褐色を呈する。底部内面に自然釉が付着する。胎土に小石を含む。9世紀前葉から中葉の所産で、下総産と考えられる。確認面からの深さ1.4m～1.6mで出土した。

17～48は土師器で、17～26は杯である。17は全体の85%、18は全体の40%が遺存する。17・18は口縁部があまり肥厚しない。口縁部外面から体部外面にかけてはロクロナデ調整を施し、体部外面下部には手持ちヘラケズリ、底部には一方向へのヘラケズリ調整を施す。17は9世紀後葉の所産と考えられる。18は器形がやや大ぶりで、胎土が赤く発色する。確認面からの深さ1.0m～1.4mの範囲から出土した破片が接合した。9世紀前葉の所産と考えられる。19は全体の40%、20は全体の35%が遺存する。19・20は口縁部外面から体部外面にかけてはロクロナデ調整を施し、体部外面下部には手持ちヘラケズリ、底部には回転糸切り後、回転ヘラケズリ調整を施す。19は全体に粗雑な作りとなり、器壁が薄く、口唇部を薄く挽き出す。10世紀前葉の所産と考えられる。20は体部がやや内湾気味に立ち上がり、口唇部を薄く挽き出す。内面全体にミガキを施す。器面が一部摩耗気味である。胎土が赤く発色し、雲母粒を多量に含む。9世紀後葉の所産と考えられる。21は全体の30%が遺存し、器高2.3cmと小ぶりである。内外面にロクロナデ調整を施す。10世紀後葉の所産と考えられる。確認面からの深さ0.4m～0.8mで出土した。22は全体の25%、23は全体の15%が遺存する。口縁部外面から体部外面にかけてはロクロナデ調整を施し、体部外面下部には手持ちヘラケズリ調整を施す。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。22は底部に回転糸切り後、多方向の手持ちヘラケズリを施す。9世紀中葉から後葉の所産と考えられる。23は底部に糸切り後、手持ちヘラケズリ調整を施す。内外面に赤彩を施す。8世紀中葉から後葉の所産と考えられる。24～26は体部から底部の一部である。24は体部外面下部から底部外面にかけて回転ヘラケズリ調整を施す。内面に赤彩を施す。胎土に雲母粒を多量に含む。25は底部を回転糸切り後、体部外面下部から底部外面周縁部に回転ヘラケズリ調整を施す。胎土に雲母粒を多量に含む。10世紀前葉の所産と考えられる。26は底部を回転糸切り後、体部外面下部から底部外面周縁部に手持ちヘラケズリ調整を施す。9世紀後葉の所産と考えられる。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。27・28は高台付杯である。貼付高台で、内面はミガキ調整を施し、赤彩を施す。胎土に雲母粒を多量に含む。27は高台が欠損している。確認面からの深さ1.4m～1.6mで出土した。29は碗である。外面はロクロナデ後にミガキを施し、内面は黒色処理を施し、ミガキを施す。胎土に雲母粒を多量に含む。9世紀前葉から中葉の所産と考えられる。



第26図 SD-004遺物(2)

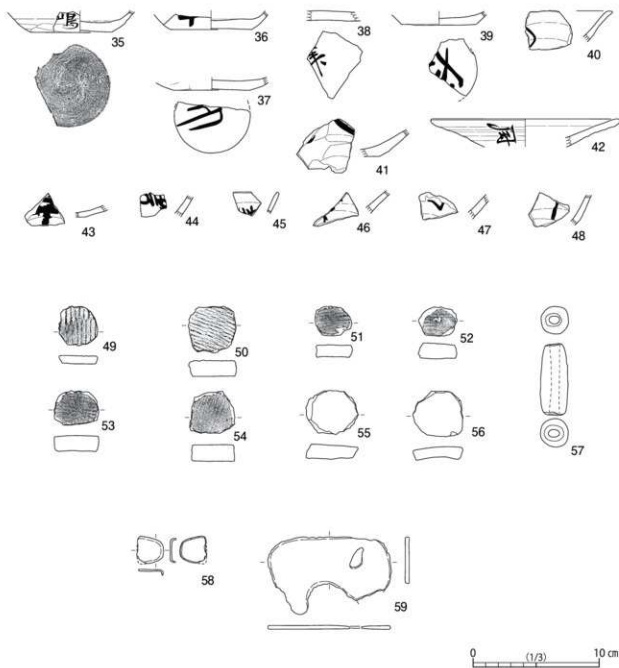
確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。30～34は皿である。いずれも10世紀代の所産と考えられる。30・31はベタ高台である。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。30は底部回転糸切り無調整である。胎土に雲母粒を多量に含む。31は内面にミガキを施す。32・33は胎土に雲母粒を多量に含む。32は確認面からの深さ1.4m～1.6mで出土した。34は胎土に微量の赤色粒を含むため、内面が赤く発色する。

35～48は土師器の墨書土器である。35～41は杯である。35・36は体部下下部から底部の一部が遺存し、墨書はいずれも体部外面下部に記される。35は底面を回転糸切り後、回転ヘラケズリ調整を施し、体部外面下部は手持ちヘラケズリ調整を施す。外面に「嶋」の墨書がある。内面には墨痕や朱墨痕と思われる痕跡が認められる。9世紀前葉から中葉の所産と考えられる。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。36は底面を回転糸切り後、回転ヘラケズリを施す。胎土に雲母粒を多量に含む。外面に墨書が認められるが、判読できない。底部内面にも墨痕のようなものが認められる。37～39は底部片で、底部に墨書がある。37は底面を回転糸切り後、手持ちヘラケズリ調整を施す。わずかに遺存する体部外面下部は手持ちヘラケズリ調整を施す。墨書が認められるが、底部の半分を欠損しており、判読できない。則天文字「天」、あるいは下総国相馬郡布佐郷の「布」などが考えられる。38は底部外面に回転糸切り後、回転ヘラケズリ調整を施す。底部の中心部に墨書が認められるが、欠損しており判読できない。和洋学園内で出土した「幸」の可能性が考えられる。39は底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。底部中央に墨書が認められるが、判読できない。「厨」の可能性が考えられる。40は口縁部片で、外面に墨書が認められる。41は体部から底部片で、体部外面に墨書が認められる。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。42・43は皿である。42は口縁部から体部の一部が遺存する。体部に「厨」と墨書する。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。43は体部から底部にかけての小片であり、全体に墨痕が認められる。44～48は小片のため器種は不明である。44は体部片で、外面に「芳」とみられる墨書がある。葛飾部の「飭」を旁のみで略式表記したとも考えられるが、吉祥文字としての「芳」の可能性もある。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。45は口縁部破片であり、外面に「幸」とみられる墨書がある。46～48は体部破片であり、外面に墨書が認められる。45～48は確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。

49～57は土製品である。49～56は土製円盤で、49～55は須恵器、56は緑釉陶器の瓶類胴部片を円盤状に加工して作られる。漁労用の錘や計量用の錘といった用途が考えられるが、詳細は不明である。50・52・55が確認面からの深さ1.4m～1.6m、54が1.2m～1.4m、56が1.0m～1.2mで出土した。57は管状土錘である。外面の50%程度にスガが付着する。孔口部に使用痕が認められる。全体に粗雑な作りであり、製作、使用の時期が中世まで下る可能性がある。

58・59は金属製品である。58は銅製の帯金具で、裏面が一部欠損している。孔は表裏両面とも確認できなかった。59は板状鉄製品である。下端中央を左から内湾するように加工している。右下端が欠損している。右上部に穿孔のようなものがある。中央部両面にはスラグが付着する。用途は不明である。確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。

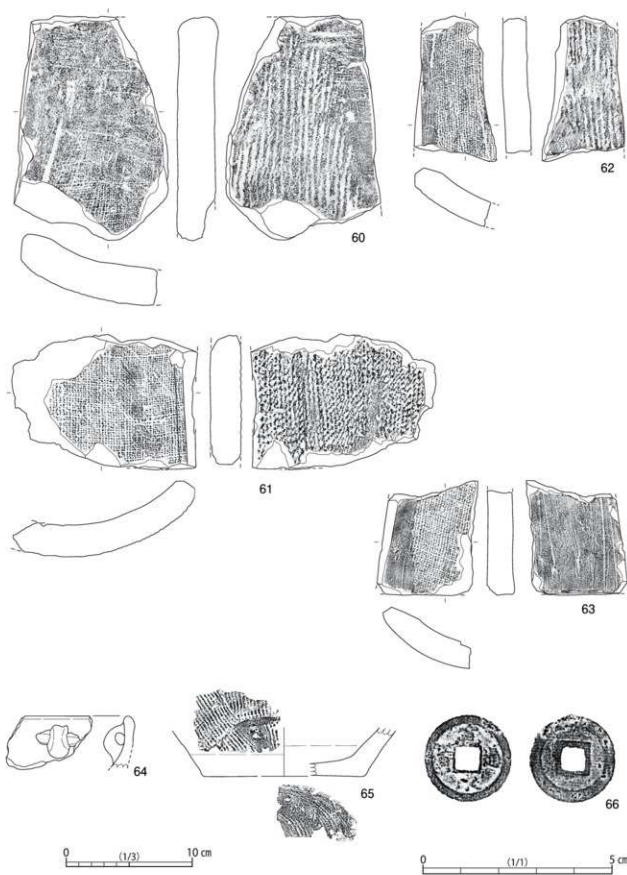
60～63は古代の平瓦である。いずれも8世紀末葉から9世紀前葉にかけての国分寺補修期の瓦と考えられる。60～61は確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。60は狭端部が6cm程度と、狭端部と凹面から見て左側面の一部が遺存するが、狭端部や側面を含め、凹凸面全体に摩耗が激しい。凹面には布合わせ目痕をもつ布目痕がある。凸面には縦方向の縄タタキ目が見られる。61は狭端部と凹面から見て右側面の一部が遺存する。側面の凸面側に一部欠損がある。凹面には布目痕と杵板圧痕が見られる。凸面に



第27図 SD-004 遺物(3)

は縄タタキ目が見られ、一部にススが付着する。62は狭端部と凹面から見て左側面と長端面の一部が遺存する。凹面の左測縁から左側面にかけて、長端面にヘラケズリ調整を施し、面取りを行っている。凹面には布目痕と杵板圧痕が見られる。凸面は上下方向のヘラケズリ調整後、ナデを施す。63は狭端部と凹面から見て左側面の一部が遺存する。凹面の左測縁から左側面にかけて、ヘラケズリ調整を施し、面取りを行っている。凹面には布目痕が見られる。凸面には縄タタキ目が見られるが、摩耗しており、やや不明瞭である。

64～66は近世の遺物である。64・65は確認面からの深さ1.0m～1.2mで出土した。64は焙烙で、18世紀代の在地産と考えられる。内耳を持ち、口唇部から少し下がった位置から底部上端にかけて貼り付け



第28図 SD-004遺物(4)

る。耳は幅広でがっちりしている。口縁はやや内湾し、内側に引き出される。内外面ともにロクロナデ調整を施す。65は陶器の播鉢で、18世紀代の瀬戸・美濃産と考えられる。胎土に混和材として大粒の白色粒を少量含む。66は寛永通宝で、新寛永である。

2 グリッド等出土遺物（第29図、第4・8表、図版11）

ここでは、グリッド一括で取り上げた遺物と、調査時にはSI-003やSI-004の遺物として取り上げたものの、整理作業時に須恵器や土師器、陶磁器と判明した遺物を取り扱う。奈良・平安時代の須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器のほか、瓦や詳細不明の金属製品、陶磁器といった遺物が出土したが、小片が多く、図示できたのは以下のものとどまる。

須恵器（1・2）

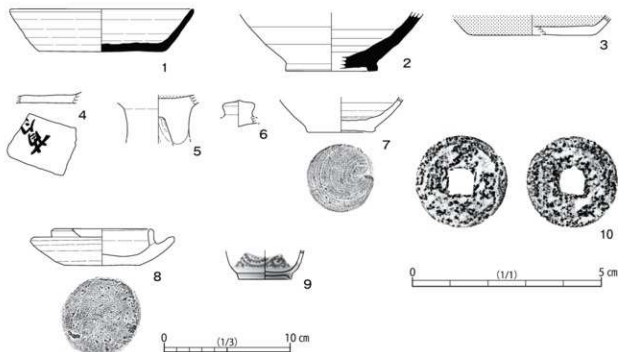
1は坏で、全体の50%が遺存する。内面と口縁部から体部にかけての外側はロクロナデ調整を施し、底部は回転ヘラケズリ調整を施す。胎土に白色粒を多量含む、小石も含む。8世紀中葉から後葉の所産と考えられる。2は甕で、体部下端から底部の一部が遺存する。外側は回転ヘラケズリ調整を施す。内面はやや黒色を呈す。1・2ともに常陸産と考えられる。

土師器（3～7）

3・4は杯である。3は底部と体部の一部が遺存する。底部外側は手持ちヘラケズリ調整を施す。内面はロクロナデ調整を施し、体部はミガキを施す。内外面ともに赤彩を施す。8世紀後葉の所産と考えられる。4は底部片である。内面はロクロナデ調整を施し、外側は周縁部に回転ヘラケズリ調整、中心部に手持ちヘラケズリ調整を施す。外側中央に「葛」の墨書がある。5は高盤の脚部の一部である。脚部外側はロクロナデ調整、脚部の斜め方向にヘラナデ調整を施す。盤の内面には赤彩を施す。8世紀後葉の所産で、畿内産高盤を模倣した在産産と考えられる。6は蓋のつまみ部分で、中央部に小突起がある。7は小型甕で胴部下半から底部が遺存する。胴部外側はナデ調整を施し、底部外側は回転糸切り後、無調整である。内面はロクロナデ調整を施す。胎土に粒がやや大きめの白色粒を多量に含む。10世紀後葉の所産と考えられる。

近世遺物（8～10）

8は土師質の灯明受皿である。受け口の切り込みはU字形で、受け口周辺に油煙が付着する。受け口の口縁はわずかに内湾しながらもほぼ真上に立ち上がる。18世紀代の所産で、在産産と考えられる。9は肥前産の磁器の小鉢で、18世紀後葉の所産と考えられる。外面体部はタコ唐草文、高台部外周に二重圏線が巡り、底部内面に見込み二重圏線内に五弁花文をこんにゃく判で施す。10は寛永通宝で、新寛永である。溝で出土したほかの2枚よりやや大きい。



第29図 グリッド等遺物

第2表 弥生時代・古墳時代土器観察表

() 推定 < > 現存長

遺物No	No	器種	法量 (cm)	遺存状況	胎土	色調・焼成	技法・文様	備考
SI-001	第10回	甕	口径 - 底径 - 器高 <6.3>	胴部片	白色粒中量 雲母粒多量	内面 灰黄褐 (10YR6/2) 外面 褐灰 (10YR5/1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 横ヘラナデ 単節縄文L R 縄で刷み	下部に輪積 み痕
SI-001	第10回	不明	口径 - 底径 - 器高 <3.8>	胴部片	白色粒少量 雲母粒中量	内面 灰褐 (5YR5/2) 外面 黒 (5YR1.7/1) 焼成 良好	内面 横ヘラナデ 外面 単節縄文L R 底外面 -	
SI-001	第10回	不明	口径 - 底径 - 器高 <3.6>	胴部片	白色粒中量	内面 暗赤褐 (10YR3/2) 外面 暗赤灰 (10YR3/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 付加糸縄文 底外面 -	
SI-001	第10回	不明	口径 - 底径 - 器高 <3.5>	胴部片	白色粒中量 雲母粒中量	内面 灰褐 (5YR4/2) 外面 黒 (5YR1.7/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 懸糸文 底外面 -	
SI-002	第11回	壺	口径 - 底径 - 器高 <3.6>	胴部片	雲母粒多量	内面 黒 (7.5YR1.7/1) 外面 黒 (7.5YR1.7/1) 焼成 やや不良	内面 ヘラナデ 外面 ナデ 単節縄文L R 底外面 -	
遺物外 (B2-89)	第11回	壺	口径 - 底径 - 器高 <7.2>	頸部~ 胴部片	白色粒少量 雲母粒少量	内面 褐灰 (7.5YR5/1) 外面 にぶい橙 (7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ミガキ 外面 単節縄文R L・L Rの羽状 縄文 S字状結節縄文	外面の無文帯 に本彩 断面に輪積痕 あり
SI-003	第13回	甕	口径 - 底径 6.2 器高 (11.7)	胴部~ 底部	白色粒多量 赤色粒・ 雲母粒微量	内面 褐灰 (7.5YR4/1) 外面 黒 (7.5YR1.7/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 単節縄文L R ヘラナデ 底外面 本紫痕	
SI-003	第13回	壺	口径 - 底径 5.0 器高 <5.2>	胴部~ 底部	白色粒多量 30%	内面 褐灰 (7.5YR4/1) 外面 黒 (7.5YR1.7/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 付加糸縄文 ヘラナデ 底外面 本紫痕	
SI-003	第13回	甕	口径 - 底径 (11.5) 器高 <2.9>	胴部~ 底部	白色粒多量 40%	内面 にぶい褐 (7.5YR6/3) 外面 にぶい赤褐 (5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 単節縄文L R 横ヘラナデ 底外面 本紫痕	
SI-003	第13回	甕	口径 - 底径 (10.6) 器高 <3.5>	胴部~ 底部	白色粒多量 30%	内面 にぶい赤褐 (5YR4/3) 外面 灰褐 (7.5YR4/2) 焼成 不良	内面 ナデ 外面 懸糸文 底外面 本紫痕	
SI-003	第14回	甕	口径 - 底径 (7.6) 器高 <3.6>	胴部~ 底部	白色粒多量 雲母粒多量 20%	内面 灰褐 (7.5YR5/2) 外面 橙 (7.5YR6/6) 焼成 やや不良	内面 横ヘラナデ 外面 ミガキ 底外面 ナデ	外面本彩

遺構No	No	部種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成		技法・文様		備考	
SI-003	第14回 6	堊	口径	-	15%	白色粒微量	内面	黒濁 (7.5YR3/1)	内面	ヘラナデ	
			底径	-			外面	黒 (7.5YR2/1)	外面	単筋縄文LR	
			器高	<5.0>			焼成	良好	底外面	-	
SI-003	第14回 7	不明	口径	-	銅部片	白色粒少量	内面	褐灰 (7.5YR4/1)	内面	縦ヘラウガキ	
			底径	-			外面	黒 (7.5YR17/1)	外面	捺糸文	
			器高	<4.4>			焼成	良好	底外面	-	
SI-003	第14回 8	不明	口径	-	銅部片	白色粒微量	内面	黒濁 (5YR2/1)	内面	ヘラナデ	内面スス 付着
			底径	-			外面	灰濁 (5YR4/2)	外面	捺糸文	
			器高	<4.6>			焼成	良好	底外面	-	
SI-003	第14回 9	不明	口径	-	銅部片	白色粒多量	内面	黒 (5YR17/1)	内面	ヘラナデ	内面スス 付着
			底径	-			外面	にぶい赤濁 (5YR5/3)	外面	捺糸文	
			器高	<3.8>			焼成	良好	底外面	-	
SI-003	第14回 10	不明	口径	-	銅部片	雲母粒微量	内面	灰濁 (7.5YR4/2)	内面	横ヘラナデ	
			底径	-			外面	黒濁 (7.5YR3/1)	外面	無筋縄文LR	
			器高	<3.4>			焼成	良好	底外面	-	
SI-003	第14回 11	不明	口径	-	銅部片	白色粒多量 雲母粒中量	内面	にぶい濁 (7.5YR5/4)	内面	ヘラナデ	
			底径	-			外面	灰濁 (7.5YR4/2)	外面	単筋縄文LR	
			器高	<4.4>			焼成	良好	底外面	-	
SI-003	第14回 12	不明	口径	-	口縁部 片	黒色粒微量	内面	灰濁 (7.5YR6/2)	内面	ナデ	
			底径	-			外面	灰濁 (7.5YR6/2)	外面	単筋縄文LR 縄で刷み	
			器高	<2.6>			焼成	良好	底外面	-	
SI-003	第14回 13	不明	口径	-	口縁部 片	白色粒中量	内面	にぶい赤濁 (5YR5/4)	内面	横ヘラナデ	
			底径	-			外面	にぶい赤濁 (5YR5/4)	外面	捺糸文 工具で刷み	
			器高	<3.8>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 1	堊	口径	12.6	口縁部 ~銅部 60%	雲母粒微量	内面	褐灰 (7.5YR4/1)	内面	横ヘラナデ	
			底径	-			外面	黒 (7.5YR17/1)	外面	単筋縄文LR 工具で刷み ヘラナデ	
			器高	<7.5>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 2	堊	口径	(15.0)	口縁部 20%	白色粒微量	内面	本灰 (2.5YR4/1)	内面	横ヘラナデ	輪組み痕 3段
			底径	-			外面	暗赤灰 (2.5YR3/1)	外面	単筋縄文LR 工具で刷み 横ヘラナデ	
			器高	<3.7>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 3	堊	口径	-	頸部~ 銅部 30%	白色粒・ 雲母粒微量	内面	褐灰 (7.5YR4/1)	内面	ナデ	
			底径	-			外面	黒 (7.5YR17/1)	外面	ヘラナデ 単筋縄文LR	
			器高	<8.3>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 4	堊	口径	-	底部 100%	白色粒多量	内面	褐灰 (7.5YR4/1)	内面	ナデ	
			底径	6.9			外面	褐灰 (7.5YR4/1)	外面	単筋縄文LR ナデ	
			器高	<3.6>			焼成	良好	底外面	木炭痕	
SI-004	第16回 5	堊	口径	-	銅部片	白色粒多量 赤色粒中量	内面	灰濁 (7.5YR5/2)	内面	ナデ	
			底径	-			外面	褐灰 (5YR4/1)	外面	横ハケ 斜ハケ	
			器高	<6.1>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 6	不明	口径	-	銅部片	白色粒微量	内面	黒濁 (7.5YR3/1)	内面	ナデ	
			底径	-			外面	黒濁 (5YR3/1)	外面	捺糸文	
			器高	<4.5>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 7	不明	口径	-	銅部片	精緻	内面	黒 (7.5YR17/1)	内面	ナデ	
			底径	-			外面	黒 (7.5YR17/1)	外面	単筋縄文LR	
			器高	<4.1>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 8	不明	口径	-	銅部片	白色粒多量	内面	黒濁 (7.5YR3/1)	内面	ナデ	
			底径	-			外面	黒濁 (5YR2/1)	外面	単筋縄文LR	
			器高	<3.3>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 9	不明	口径	-	銅部片	白色粒・ 雲母粒多量	内面	褐灰 (7.5YR4/1)	内面	横ヘラナデ	
			底径	-			外面	灰濁 (7.5YR5/2)	外面	捺糸文	
			器高	<3.0>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 10	不明	口径	-	口縁部 片	白色粒微量	内面	黒濁 (7.5YR3/1)	内面	ナデ	
			底径	-			外面	黒濁 (5YR3/1)	外面	単筋縄文LR 工具で刷み	
			器高	<3.1>			焼成	良好	底外面	-	
SI-004	第16回 11	不明	口径	-	口縁部 片	白色粒微量	内面	褐灰 (10YR4/1)	内面	横ヘラナデ	
			底径	-			外面	黒濁 (10YR3/1)	外面	捺糸文 工具で刷み	
			器高	<3.3>			焼成	良好	底外面	-	
遺構外 (B2-57)	第17回 1	不明	口径	-	銅部~ 底部 25%	白色粒多量	内面	褐灰 (5YR4/1)	内面	ナデ	内部スス 付着
			底径	(7.0)			外面	にぶい赤濁 (2.5YR5/4)	外面	単筋縄文LR	
			器高	<6.3>			焼成	良好	底外面	木炭痕	
遺構外 (SD-004)	第17回 2	不明	口径	-	銅部~ 底部 30%	白色粒中量	内面	灰濁 (5YR5/2)	内面	摩耗	内部スス 付着
			底径	(7.8)			外面	灰濁 (7.5YR4/2)	外面	捺糸文	
			器高	<4.6>			焼成	やや不良	底外面	木炭痕	
遺構外 (SD-004)	第17回 3	不明	口径	-	銅部~ 底部 80%	白色粒微量	内面	にぶい赤濁 (5YR5/4)	内面	横ヘラナデ	内面圧痕
			底径	5.2			外面	黒濁 (10YR3/1)	外面	単筋縄文LR 捺糸文	
			器高	<2.4>			焼成	良好	底外面	木炭痕	

遺構No	No	部 種	法 量 (cm)	遺存度	胎 土	色 調・焼 成		技 法・文 様		備 考	
遺構外 (B2-15)	第 17 区 4	壺	口径	—	肩部 10%	砂粒中量	内面	にぶい橙 (7.5YR7/4)	内面	ナデ	
			底径	—			外面	にぶい橙 (7.5YR7/4)	外面	単節縄文L R 縦・斜ハケ	
			器高	<6.2>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (B2-83)	第 17 区 5	不明	口径	—	胴部片	白色粒多量 黒色粒中量	内面	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内面	ヘラナデ	内面の一部 と外面赤彩
			底径	—			外面	にぶい橙 (7.5YR6/4)	外面	横ヘラナデ 付加条縄文	
			器高	<4.7>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (B2-82)	第 17 区 6	不明	口径	—	頸部～ 胴部 10%	白色粒微量	内面	灰褐 (5YR5/2)	内面	横ミガキ	
			底径	—			外面	黒 (5YR1.7/1)	外面	RのS字状結節縄文 横ヘ ラナデ 捺糸文	
			器高	<6.5>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 7	不明	口径	—	胴部片	白色粒・ 雲母粒微量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	ヘラナデ	
			底径	—			外面	灰褐 (5YR5/2)	外面	捺糸文	
			器高	<3.9>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 8	不明	口径	—	胴部 10%	白色粒多量	内面	灰褐 (5YR4/1)	内面	横ヘラナデ	内面スス 付着
			底径	—			外面	灰褐 (5YR5/2)	外面	捺糸文	
			器高	<9.3>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 9	不明	口径	—	胴部片	白色粒多量 赤色粒少量	内面	黒 (5YR1.7/1)	内面	ナデ	内面スス 付着
			底径	—			外面	にぶい赤褐 (5YR4/3)	外面	捺糸文	
			器高	(5.1)			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (B2-83)	第 17 区 10	不明	口径	—	胴部片	白色粒多量	内面	灰褐 (5YR4/1)	内面	斜ヘラナデ	
			底径	—			外面	にぶい赤褐 (5YR5/3)	外面	捺糸文	
			器高	<6.3>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-001)	第 17 区 11	不明	口径	—	胴部片	白色粒・ 黒色粒中量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	横ヘラナデ	
			底径	—			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	捺糸文	
			器高	<5.0>			焼成	やや不良	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 12	不明	口径	—	胴部片	白色粒・ 雲母粒多量	内面	黒褐 (5YR2/1)	内面	横ヘラナデ	
			底径	—			外面	灰褐 (5YR5/2)	外面	捺糸文	
			器高	<4.8>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 13	不明	口径	—	胴部片	白色粒中量 雲母粒少量	内面	にぶい赤褐 (5YR5/4)	内面	横ヘラナデ	
			底径	—			外面	灰褐 (5YR4/1)	外面	付加条縄文	
			器高	<3.3>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 14	不明	口径	—	胴部片	白色粒・ 雲母粒少量	内面	灰褐 (7.5YR6/2)	内面	ヘラナデ	外面赤彩
			底径	—			外面	灰褐 (7.5YR6/2)	外面	単節縄文R L 横ヘラナデ	
			器高	<4.0>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 15	不明	口径	—	口縁部 10%	白色粒中量	内面	灰褐 (10YR4/1)	内面	横ヘラナデ	
			底径	—			外面	黒褐 (10YR3/1)	外面	工具で削む 捺糸文 横ヘ ラナデ	
			器高	<6.2>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 16	不明	口径	—	口縁部 片	白色粒・ 雲母粒微量	内面	にぶい褐 (7.5YR6/4)	内面	横ヘラナデ	
			底径	—			外面	灰褐 (7.5YR5/2)	外面	付加条縄文 ヘラナデ	
			器高	<3.2>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (SD-004)	第 17 区 17	不明	口径	—	口縁部 片	白色粒・ 雲母粒微量	内面	灰褐 (5YR4/2)	内面	ヘラナデ	
			底径	—			外面	灰褐 (5YR4/2)	外面	単節縄文L R・単節縄文L Rの羽状縄文 工具で削む	
			器高	<2.6>			焼成	良好	底外面	—	
遺構外 (B2-57)	第 18 区 1	台付 栗	口径	—	胴部～ 底部 70%	白色粒多量	内面	にぶい黄褐 (10YR5/4)	内面	ヘラナデ	古墳時代 前期
			底径	<5.0>			外面	にぶい黄褐 (10YR4/3)	外面	縦ハケ 斜ハケ	
			器高	<2.9>			焼成	良好	底外面	—	
SI-001	第 18 区 2	栗	口径	—	胴部片	雲母粒多量 小石含	内面	橙 (5YR6/6)	内面	横ハケ ヘラナデ	古墳時代 前期
			底径	—			外面	にぶい赤褐 (5YR4/3)	外面	横ハケ	
			器高	<4.8>			焼成	やや不良	底外面	—	

第3表 奈良・平安時代・近石器観察表

() 推定 < > 現存長

通標%	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SD-001	第20国 1	陶器	香炉	口径— 底径(9.0) 器高<7.0>	口縁部— 底部25%	精緻	内面 浅黄 (2.5Y7/3) 外面 浅黄 (2.5Y7/3) 焼成 良好	内面 灰釉 外面 灰釉 底外面 無釉	足貼付 瀬戸・美濃 18世紀前半 —中世
SD-001	第20国 2	陶器	鉢鉢	口径— 底径— 器高<4.2>	口縁部10%	白色粒多量	内面 暗赤褐 (5YR3/2) 外面 暗赤褐 (5YR3/2) 焼成 良好	内面 灰釉 外面 灰釉 底外面 —	丹波 17世紀中葉
SD-004	第25国 1	須恵器	蓋	口径(17.6) 底径— 器高<1.6>	口縁部— 天井部15%	白色粒微量 雲母粒少量	内面 灰白 (5Y7/1) 外面 灰白 (5Y7/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 回転ヘラケズリ	常陸産
SD-004	第25国 2	須恵器	蓋	口径(14.5) 底径— 器高<2.0>	口縁部— 天井部10%	白色粒多量	内面 灰 (7.5Y5/1) 外面 灰 (7.5Y5/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 回転ヘラケズリ	常陸産
SD-004	第25国 3	須恵器	高台 付杯	口径(19.0) 底径— 器高<2.9>	口縁部— 体部10%	黒色粒多量	内面 灰白 (2.5Y5/1) 外面 灰白 (2.5Y5/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 —	
SD-004	第25国 4	須恵器	高台 付盤	口径— 底径9.0 器高<2.5>	体部— 底部70%	白色粒中量	内面 褐灰 (10YR6/1) 外面 褐灰 (10YR6/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 回転ヘラケズリ	常陸産 転用観
SD-004	第25国 5	須恵器	高台 付盤	口径(24.2) 底径(13.5) 器高4.8	25%	雲母粒多量 小石含む	内面 褐灰 (7.5YR6/1) 外面 褐灰 (7.5YR4/1) 焼成 やや不貞	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 回転ヘラケズリ	新治産
SD-004	第25国 6	須恵器	杯	口径— 底径(8.1) 器高<2.6>	体部— 底部20%	雲母粒多量	内面 灰白 (5Y7/1) 外面 灰白 (5Y7/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 ヘラケズリ	新治産
SD-004	第25国 7	須恵器	杯	口径— 底径(8.3) 器高<1.5>	体部— 底部25%	白色粒多量	内面 褐灰 (10YR6/1) 外面 褐灰 (10YR6/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 手持ちヘラケズリ	常陸産
SD-004	第25国 8	須恵器	甕	口径(24.0) 底径— 器高<15.3>	口縁部— 胴部15%	白色粒多量	内面 褐灰 (10YR6/1) 外面 褐灰 (10YR6/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ・アテ具 外面 平行タタキ	下総産
SD-004	第25国 9	須恵器	甕	口径— 底径— 器高<11.5>	頸部— 底部15%	白色粒多量	内面 黄灰 (2.5Y6/1) 外面 黄灰 (2.5Y6/1) 焼成 やや不貞	内面 アテ具前後ヘラナデ 外面 平行タタキ・ヘラケズリ	下総産
SD-004	第25国 10	須恵器	甕	口径— 底径— 器高<11.8>	頸部— 底部15%	白色粒多量 小石含む	内面 灰 (5Y5/1) 外面 黄灰 (2.5Y5/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ・櫛編文	常陸産
SD-004	第25国 11	須恵器	甕	口径— 底径— 器高<5.4>	頸部— 胴部15%	白色粒・ 雲母粒多量	内面 褐灰 (10YR6/1) 外面 褐灰 (10YR5/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ・アテ具 外面 口クロナデ 底外面 平行タタキ	新治産?
SD-004	第26国 12	須恵器	甕	口径— 底径— 器高<7.8>	胴部片	雲母粒多量 半透明粒含む	内面 灰白 (5Y6/1) 外面 灰白 (5Y6/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ・格子目タタキ 底外面 —	新治産?
SD-004	第26国 13	須恵器	甕	口径— 底径— 器高<4.6>	口縁部片	白色粒多量 小石含む	内面 灰 (N4/1) 外面 灰 (N4/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 —	常陸産
SD-004	第26国 14	須恵器	甕	口径— 底径— 器高<7.5>	口縁部片	白色粒・ 黒色粒中量 針状物質多量	内面 灰白 (2.5Y5/1) 外面 灰 (N5/1) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 —	南比企産 内面に 自然釉
SD-004	第26国 15	須恵器	壺	口径— 底径— 器高<7.2>	頸部— 胴部25%	白色粒微量	内面 褐灰 (5YR5/1) 外面 褐灰 (5YR6/1) 焼成 やや不貞	内面 アテ具前後ヘラナデ 外面 口クロナデ 底外面 —	常陸産
SD-004	第26国 16	須恵器	壺	口径— 底径(8.8) 器高<6.3>	頸部— 底部30%	白色粒少量 小石含む	内面 灰黄褐 (10YR5/2) 外面 灰黄褐 (10YR5/2) 焼成 やや不貞	内面 口クロナデ 外面 回転ヘラケズリ 底外面 口クロナデ	下総産 底面に 自然釉
SD-004	第26国 17	土師器	杯	口径13.7 底径6.0 器高3.9	85%	白色粒・ 雲母粒少量	内面 橙 (5YR6/6) 外面 橙 (5YR6/6) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 手持ちヘラケズリ	
SD-004	第26国 18	土師器	杯	口径(18.3) 底径11.1 器高4.7	40%	白色粒・ 雲母粒中量 小石含む	内面 明赤褐 (5YR5/6) 外面 明赤褐 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 口クロナデ 外面 口クロナデ 底外面 手持ちヘラケズリ	胎土赤く s 発色

道標No.	No.	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色面・焼成		技法		備考
SD-004	第26国 19	土師器	杯	口径 (137)	40%	雲母粒中量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	ナデ	
				底径 6.0			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	クロコナデ 手持ちヘラケズリ	
				器高 3.2			焼成	やや不良	底外面	回転糸切り後 回転ヘラケズリ	
SD-004	第26国 20	土師器	杯	口径 (143)	35%	雲母粒多量	内面	明赤褐 (5YR5/6)	内面	ミガキ	胎土赤く 発色
				底径 7.4			外面	明赤褐 (5YR5/6)	外面	クロコナデ 回転ヘラケズリ	
				器高 4.2			焼成	良好	底外面	回転糸切り後 回転ヘラケズリ	
SD-004	第26国 21	土師器	杯	口径 (111)	30%	雲母粒少量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	クロコナデ	
				底径 (6.0)			外面	橙 (5YR6/6)	外面	クロコナデ	
				器高 2.3			焼成	良好	底外面	クロコナデ	
SD-004	第26国 22	土師器	杯	口径 (127)	25%	白色粒・ 雲母粒少量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	クロコナデ	
				底径 (7.0)			外面	橙 (5YR6/6)	外面	クロコナデ	
				器高 3.2			焼成	良好	底外面	手持ちヘラケズリ	
SD-004	第26国 23	土師器	杯	口径 (114)	15%	白色粒中量 雲母粒少量	内面	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	内面	クロコナデ	内外面赤彩
				底径 (6.8)			外面	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	外面	クロコナデ 手持ちヘラケズリ	
				器高 3.9			焼成	良好	底外面	糸切り後 手持ちヘラケズリ	
SD-004	第26国 24	土師器	杯	口径 -	66% 体部～ 底部 40%	白色粒微量 雲母粒多量	内面	明赤褐 (5YR5/6)	内面	クロコナデ	内面赤彩
				底径 (6.6)			外面	明赤褐 (5YR5/6)	外面	クロコナデ 回転ヘラケズリ	
				器高 <1.7>			焼成	良好	底外面	回転ヘラケズリ	
SD-004	第26国 25	土師器	杯	口径 -	体部～ 底部 30%	雲母粒多量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	クロコナデ	
				底径 (6.8)			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	クロコナデ 回転ヘラケズリ	
				器高 <1.8>			焼成	良好	底外面	回転糸切り後 回転ヘラケズリ	
SD-004	第26国 26	土師器	杯	口径 -	体部～ 底部 30%	白色粒微量 雲母粒少量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	クロコナデ	
				底径 (7.2)			外面	橙 (5YR6/6)	外面	クロコナデ 手持ちヘラケズリ	
				器高 <2.4>			焼成	良好	底外面	回転糸切り後 手持ちヘラケズリ	
SD-004	第26国 27	土師器	高台 付杯	口径 -	体部～ 底部 50%	雲母粒多量	内面	にぶい橙 (5YR7/4)	内面	ミガキ	内面赤彩
				底径 -			外面	にぶい橙 (5YR7/4)	外面	クロコナデ	
				器高 <1.6>			焼成	良好	底外面	-	
SD-004	第26国 28	土師器	高台 付杯	口径 -	体部～ 底部 30%	雲母粒多量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	ミガキ	内面赤彩
				底径 (6.8)			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	クロコナデ	
				器高 <1.5>			焼成	良好	底外面	クロコナデ	
SD-004	第26国 29	土師器	碗	口径 (16.0)	口縁部～ 体部 10%	雲母粒多量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	ミガキ	内面黒色 処理
				底径 -			外面	黒 (10YR17/1)	外面	クロコナデ後ミガキ	
				器高 <5.3>			焼成	良好	底外面	-	
SD-004	第26国 30	土師器	皿	口径 (135)	20%	白色粒微量 雲母粒多量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	クロコナデ	
				底径 (6.8)			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	クロコナデ	
				器高 2.8			焼成	良好	底外面	回転糸切り	
SD-004	第26国 31	土師器	皿	口径 (130)	20%	雲母粒中量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	ミガキ	
				底径 (6.9)			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	クロコナデ	
				器高 2.3			焼成	良好	底外面	クロコナデ	
SD-004	第26国 32	土師器	皿	口径 (148)	20%	雲母粒多量	内面	にぶい橙 (5YR7/4)	内面	クロコナデ	
				底径 (6.5)			外面	にぶい橙 (5YR7/4)	外面	クロコナデ 回転ヘラケズリ	
				器高 2.0			焼成	良好	底外面	回転ヘラケズリ	
SD-004	第26国 33	土師器	皿	口径 (146)	10%	白色粒少量 赤色粒少量 雲母粒多量	内面	明赤褐 (2.5YR5/6)	内面	クロコナデ	
				底径 (6.0)			外面	明赤褐 (2.5YR5/6)	外面	クロコナデ 回転ヘラケズリ	
				器高 1.3			焼成	良好	底外面	回転ヘラケズリ	
SD-004	第26国 34	土師器	皿	口径 (130.9)	口縁部～ 体部 25%	白色粒少量 赤色粒少量 雲母粒中量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	クロコナデ	
				底径 -			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	クロコナデ 回転ヘラケズリ	
				器高 <1.6>			焼成	良好	底外面	-	
SD-004	第27国 35	土師器	杯	口径 -	体部～ 底部 70%	白色粒少量 雲母粒多量	内面	にぶい橙 (5YR6/4)	内面	クロコナデ	体部外面黒 書「嶋」 胎土が赤く 発色
				底径 6.4			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	クロコナデ 手持ちヘラケズリ	
				器高 <1.7>			焼成	良好	底外面	回転糸切り後 回転ヘラケズリ	
SD-004	第27国 36	土師器	杯	口径 -	体部～ 底部 50%	雲母粒多量	内面	にぶい橙 (7.5YR6/4)	内面	クロコナデ	体部外面 黒書 底部内面磨 付着?
				底径 6.6			外面	にぶい橙 (7.5YR6/4)	外面	クロコナデ	
				器高 <1.5>			焼成	良好	底外面	回転糸切り後 回転ヘラケズリ	

遺構No.	No.	種類	器種	法量 (cm)	遺存率	胎土	色面・焼成	技法	備考
SD-004	第27国 37	土師器	杯	口径 - 底径 6.0 器高 <1.0>	底部 50%	雲母粒多量	内面 にぶい橙 (5YR6/4) 外面 にぶい橙 (5YR6/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 手持ちヘラケズリ 底外面 回転糸切り後 手持ちヘラケズリ	外面黒書 「天？」 「布？」
SD-004	第27国 38	土師器	杯	口径 - 底径 - 器高 -	底部片	雲母粒多量	内面 にぶい橙 (5YR6/4) 外面 橙 (5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 - 底外面 回転糸切り後 回転ヘラケズリ	外面黒書 「幸？」
SD-004	第27国 39	土師器	杯	口径 - 底径 - 器高 -	底部片	白色粒・ 雲母粒中量	内面 にぶい橙 (5YR6/6) 外面 にぶい橙 (5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 - 底外面 手持ちヘラケズリ	底部外面黒書 「厨？」
SD-004	第27国 40	土師器	杯	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部 破片	雲母粒微量	内面 にぶい橙 (7.5YR7/3) 外面 にぶい橙 (7.5YR7/3) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 -	外面黒書
SD-004	第27国 41	土師器	杯	口径 - 底径 - 器高 -	体部～ 底部片	雲母粒微量	内面 にぶい橙 (7.5YR7/4) 外面 にぶい橙 (7.5YR7/4) 焼成 やや不良	内面 ミガキ 外面 ロクロナデ ヘラケズリ 底外面 回転糸切り	外面黒書
SD-004	第27国 42	土師器	皿	口径 (14.7) 底径 - 器高 <2.2>	口縁部～ 体部 20%	白色粒微量 雲母粒多量	内面 にぶい橙 (5YR6/4) 外面 にぶい橙 (5YR6/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転ヘラケズリ	体部外面黒書 「厨？」
SD-004	第27国 43	土師器	皿	口径 - 底径 - 器高 -	体部～ 底部片	雲母粒多量	内面 にぶい橙 (7.5YR7/4) 外面 にぶい橙 (7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 ヘラケズリ	外面黒書
SD-004	第27国 44	土師器	不明	口径 - 底径 - 器高 -	体部片	雲母粒多量	内面 にぶい橙 (7.5YR6/4) 外面 にぶい橙 (7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 -	外面黒書 「芳(器)？」
SD-004	第27国 45	土師器	不明	口径 - 底径 - 器高 -	口縁部 破片	雲母粒中量	内面 にぶい橙 (7.5YR7/4) 外面 にぶい橙 (7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 -	外面黒書 「幸？」
SD-004	第27国 46	土師器	不明	口径 - 底径 - 器高 -	体部破 片	雲母粒微量	内面 にぶい橙 (7.5YR6/4) 外面 にぶい橙 (7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ロクロナデ ヘラケズリ	外面黒書
SD-004	第27国 47	土師器	不明	口径 - 底径 - 器高 -	体部破 片	白色粒微量	内面 橙 (5YR6/6) 外面 にぶい橙 (7.5YR7/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	外面黒書 内面赤彩？
SD-004	第27国 48	土師器	不明	口径 - 底径 - 器高 -	体部破 片	雲母粒多量	内面 橙 (5YR6/6) 外面 橙 (5YR6/6) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 -	外面黒書
SD-004	第28国 64	土師質 土器	焙烙	口径 - 底径 (128) 器高 <4.2>	口縁部 10%	精緻	内面 にぶい黄橙 (10YR7/4) 外面 にぶい黄橙 (10YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 -	在地系 18世紀代
SD-004	第28国 65	陶器	揺鉢	口径 - 底径 - 器高 <3.8>	体部～ 底部 20%	白色粒少量	内面 にぶい赤褐 (5YR4/4) 外面 にぶい赤褐 (5YR5/4) 焼成 良好	内面 目目 外面 回転ヘラケズリ 底外面 回転糸切り後 回転ヘラケズリ	瀬戸・美濃 産 18世紀代
遺構外 (B2-04)	第29国 1	須恵器	杯	口径 14.5 底径 9.8 器高 3.3	50%	白色粒多量 小石含	内面 灰白 (10YR7/1) 外面 灰白 (10YR7/1) 焼成 やや不良	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底外面 回転ヘラケズリ	常陸産
遺構外 (B2-62)	第29国 2	須恵器	壺	口径 - 底径 7.2 器高 <4.6>	胴部～ 底部 20%	白色粒微量	内面 褐灰 (10YR5/1) 外面 褐灰 (10YR6/1) 焼成 やや不良	内面 ロクロナデ 外面 回転ヘラケズリ 底外面 回転ヘラケズリ	
遺構外 (B2-62)	第29国 3	土師器	杯	口径 - 底径 (100) 器高 <1.6>	底部 20%	雲母粒微量	内面 にぶい橙 (5YR7/4) 外面 にぶい橙 (5YR7/4) 焼成 良好	内面 ロクロナデ・ミガキ 外面 ナデ 底外面 手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
遺構外 (B2-04)	第29国 4	土師器	杯	口径 - 底径 - 器高 -	底部片	白色粒・ 雲母粒少量	内面 橙 (5YR7/6) 外面 橙 (5YR6/6) 焼成 やや不良	内面 ロクロナデ 外面 - 底外面 回転ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ	底部外面黒書 「厨？」
遺構外 (B2-62)	第29国 5	土師器	高盤	口径 - 底径 - 器高 <3.9>	脚部 10%	白色粒少量 雲母粒少量	内面 橙 (5YR6/6) 外面 橙 (5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ 底外面 -	内面赤彩
遺構外 (B2-93)	第29国 6	土師器	蓋	口径 2.5 底径 - 器高 <2.0>	積み 90%	雲母粒微量	内面 にぶい橙 (5YR7/4) 外面 橙 (5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	
遺構外 (B2-62)	第29国 7	土師器	小型 壺	口径 - 底径 5.2 器高 <2.8>	胴部～ 底部 80%	白色粒多量 雲母粒少量	内面 橙 (5YR7/6) 外面 橙 (5YR7/6) 焼成 やや不良	内面 ロクロナデ 外面 ナデ 底外面 回転糸切り	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成			技法		備考
							内面	外面	焼成	内面	外面	
遺構外 (B3-07)	第29国 8	土師質 土器	灯明 皿	口径	11.2	95%	雲母粒微量	内面	橙 (5YR6-6)	内面	ロクロナデ	内外面油障 付着
				底径	6.0			外面	橙 (5YR6-6)	外面	ロクロナデ	
				器高	2.9			焼成	不良	底外面	回転糸切り	
遺構外 (B2-04)	第29国 9	曲輪	小鉢	口径	-	50%	精緻	内面	明緑灰 (7.5GY8-1)	内面	見込み二重面輪内に五弁花 文 (之込にやく摺)	二重面輪 文・高台外部細二 重面輪
				底径	4.2			外面	明緑灰 (7.5GY8-1)	外面	二重面輪	
				器高	<2.3>			焼成	良好	底外面	-	

第4表 土製品計測表

No	遺構No	挿図番号	製品名	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
1	SD-001	第20国3	人形	土師質	66.0	26.0	26.8	100.1	
2	SD-004	第27国49	円盤	須恵器	31.0	30.0	6.5	8.1	外面平行タタキ後ナデ
3	SD-004	第27国50	円盤	須恵器	36.0	38.0	13.0	25.1	外面平行タタキ後ナデ
4	SD-004	第27国51	円盤	須恵器	23.0	28.5	9.5	9.9	外面平行タタキ後ミガキ
5	SD-004	第27国52	円盤	須恵器	22.5	30.5	12.0	10.9	外面平行タタキ後ナデ
6	SD-004	第27国53	円盤	須恵器	26.0	35.0	12.0	16.4	外面平行タタキ後ナデ
7	SD-004	第27国54	円盤	須恵器	32.0	35.0	13.0	22.6	外面平行タタキ後ナデ
8	SD-004	第27国55	円盤	須恵器	35.0	41.0	11.5	17.5	外面ナデ
9	SD-004	第27国56	円盤	緑釉陶器	36.0	39.5	10.0	17.4	外面に自然釉
No	遺構No	挿図番号	製品名	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	備考
					長さ	径	孔径		
10	SD-004	第27国57	土鉢	土師質	57.0	22.0	9.0	23.8	外部半面にスス付着

第5表 奈良・平安時代瓦観察表

遺構	挿図番号	種類	凹面	凸面	胎土	焼成	色調	備考
SF-001	第19国 1	平瓦	布目痕	縄タタキ目	黒色粒	良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	凹面側縁際と側縁 はヘラケズリ
SD-004	第28国 60	平瓦	布目痕 杵板圧痕	縄タタキ目	白色粒・黒色粒・ 透明粒	不良	明赤褐色 (5YR5/6)	
SD-004	第28国 61	平瓦	布目痕	縄タタキ目	透明粒	やや不良	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	
SD-004	第28国 62	平瓦	布目痕	縄タタキ目	白色粒・透明粒・ 雲母粒	良好	橙色 (2.5YR6/6)	凹面側縁際と側縁 はヘラケズリ
SD-004	第28国 63	平瓦	布目痕	ヘラケズリ 後ナデ	赤色粒・雲母粒	良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	凹面側縁際と側縁 はヘラケズリ

第6表 金属製品計測表

No	遺構No	挿図番号	製品名	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
1	SD-001	第20国4	刀子	鉄	37.0	葉部: 9.0 刃部: 7.0	1.0	29	
2	SD-004	第27国58	帯金具	鋼	21.0	22.0	5.0	2.8	
3	SD-004	第27国59	不明	鉄	97.0	37.0	3.0	65.3	

第7表 銭貨計測表

No	遺構No	挿図 番号	銭貨名	計測値 (mm)				重量 (g)	備考	
				縁外径	縁内径	郭外径	縁厚			
1	SD-001	第20国5	寛永通寶	22.8	18.8	8.0	6.2	1.2	2.6	新寛永
2	SD-004	第28国66	寛永通寶	22.3	18.2	7.5	6.5	1.1	2.5	新寛永
3	SI-003	第29国10	寛永通寶	25.0	19.5	8.0	6.5	1.2	3.3	新寛永

第3章 総括

第1節 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代は出土地点・出土層位が明確な石器が1点のみにとどまった。国府台遺跡周辺から検出した旧石器時代の石器群は、殿台遺跡の細石刃核を伴う石器群、今島田遺跡・大宮越遺跡の尖頭器・ナイフ形石器を伴う石器群、下総台地最初の旧石器時代石器群検出例となった丸山遺跡や権現原遺跡の切り出し型ナイフ形石器・角錐状石器を伴う石器群が挙げられるが、IX a 層下部からの出土は現時点でもっとも古い段階の石器と言える。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物は縄文時代中期加曽利EⅡ式と晩期安行式の土器片が少量と、石器が2点出土した。過去の調査⁽¹⁾では、国府台遺跡第192地点の南の台地縁辺部に当たる第29地点において、縄文時代中期から後期と考えられている住居の竪1基と、住居の柱穴とみられるピット群を検出した。国府台遺跡全体では縄文時代の遺構・遺物の検出が少ない中、今回の調査によって、縄文時代中期以降について、台地南端の縁辺部から台地中央部にかけての活動の痕跡が認められた。

第2節 弥生時代・古墳時代

今回の調査区内では弥生時代後期後葉から末葉にかけての堅穴住居跡4軒と弥生土器・石器を検出した。いずれの堅穴住居跡も周囲の攪乱が入り込むなどして完形での検出はできず、土器も小片が多く時期の特定は困難であったが、土器の特徴や周辺の調査成果等から、堅穴住居跡の時期は弥生時代後期後葉から末葉であると考えられる⁽²⁾。国府台遺跡第192地点の周辺では、第29地点から第3地点、第20地点、第120地点にかけて中期後葉の環濠集落と環濠外に方形周溝墓が分布し、第29地点の調査区西側に後期前葉から中葉にかけての環濠集落と方形周溝墓が位置する。また、和洋学園国府台キャンパス内遺跡では調査区南側に後期前葉の堅穴住居跡1軒を検出している。後期後葉から古墳時代初頭では、第29地点で堅穴住居跡13軒、第187地点で堅穴住居跡4軒を検出している。

以上のように、国府台遺跡第192地点とその周辺の弥生時代の遺構・遺物の検出は、台地縁辺部に集中している様相が見られる。集落の様相を古い時期から概観すると、中期後半に台地南端の縁辺部で環濠集落が成立し、集落の北西と北東に方形周溝墓群が環濠の外側に設けられた。後期前葉には環濠集落が台地のより西側に移動した。後期前葉の集落は、現在の県道市川松戸線を越えて和洋学園国府台キャンパス付近まで広がっていた可能性が高い。また、国府台遺跡の東側にある須和田遺跡でも後期前葉の環濠集落が存在した可能性が指摘されていることから、後期前葉の集落は台地南端の縁辺部に広く分布していたと考えられる。一方、後期後葉から古墳時代初頭にかけての集落は、環濠に囲まれず、国府台遺跡と須和田遺跡に広く点在すると考えられている。第29地点や第187地点は台地の縁辺部に当たるが、今回の調査地点である第192地点は台地の内陸部に位置し、当該期の集落が広く国府台一体に広がっていた可能性があることが明らかになった。

古墳時代の遺構は検出されなかったが、遺物は甕の破片が少量と、埴輪片が1点出土した。いずれも古墳時代前期の所産と考えられる。第18図2はSI-001より出土したことから、今回の調査地点周辺で弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて人々の活動領域があったと考えられる。

第3節 奈良・平安時代以降

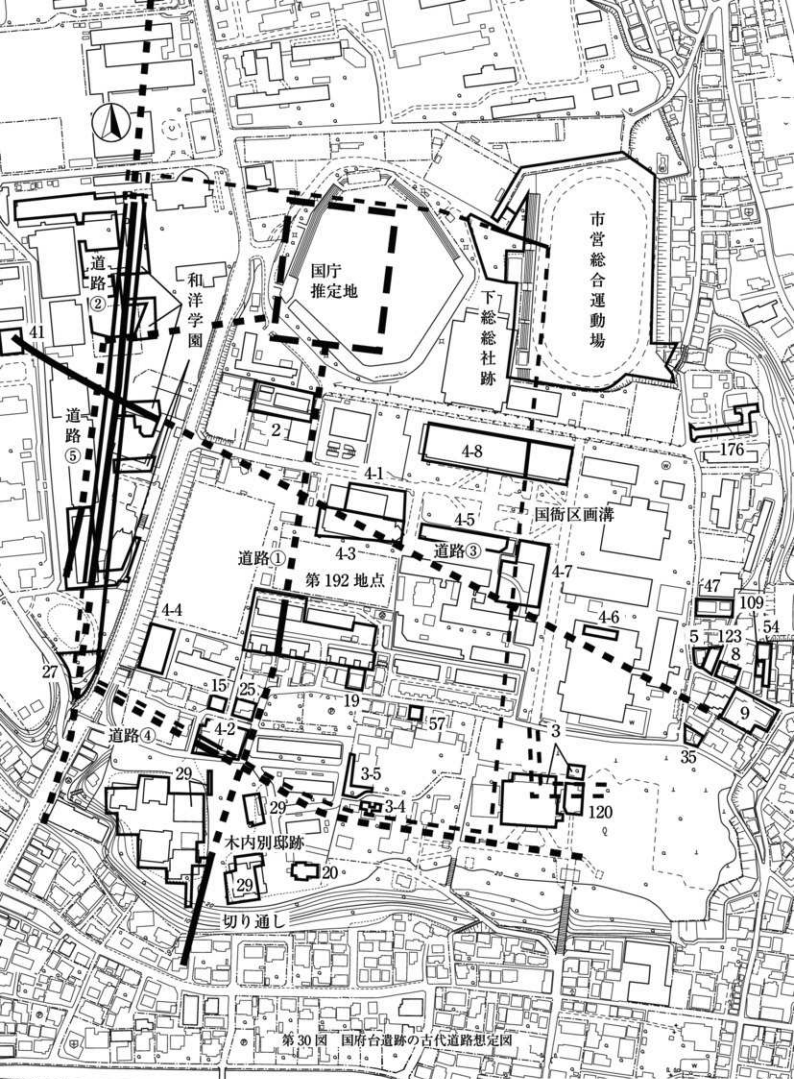
今回の調査では東西にそれぞれ1条の側溝を有する古代の南北道路跡1条と^(注3)、道路西側溝を壊して造成された古代の大溝1条を検出した。遺物は奈良・平安時代の須恵器・土師器を中心に^(注4)、緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・土製品・刀子・銅製帯金具が出土した。また、道路側溝や大溝などから近世の陶器・磁器・土師質土器・土製品・寛永通宝なども出土した。これらのことから、古代の遺構が廃絶した後も、第192地点周辺は近世まで一定の規模での土地利用があったと推測できる。

1 国府台遺跡と周辺の遺跡の調査成果と道路・区画溝（第30図）

ここで、検出した古代の南北道路跡（道路①）と大溝の性格を検討するために、国府台遺跡第192地点周辺の調査成果について概観する^(注5)。第192地点の北約240mの地点には国府台球場がある。この球場西側付近で大量の古瓦が表面採集されたことから、球場付近が下総国府の国庁推定地とされるが、現在までの発掘調査で国庁の痕跡は確認されていない。周辺では球場東側にある下総総社跡の調査で、8世紀から9世紀にかけての堅穴建物跡12棟、溝5条が検出された。8世紀前葉の堅穴住居跡からはカマド祭祀の痕跡や墨書土器「玉」が、8世紀中葉の堅穴住居跡からは墨書土器「相馬」が、8世紀後葉の堅穴住居跡からは土器集積遺構が見つかった。墨書土器の「相馬」は相馬郡、あるいは相馬郷を、「玉」は埴生郡玉作郷を表しているとみられ、堅穴住居跡は国府造営の労働力として在地で徴発された人々の居住場所であったと推測される。また、土器集積遺構からは須恵器高台坏、蓋、高台盤や大小様々な甕類が出土していることから、国府であった可能性が指摘されている。調査範囲の東西に延びる溝は、隣接する市営総合運動場調査地点まで続く溝であり、国衙の北側を区画する溝の可能性が高い。市営総合運動場調査地点では、8世紀を中心に堅穴住居跡65軒、掘立柱建物跡8棟、溝6条、土坑多数が検出されている。国府の施設と考えられる遺構は検出されていないが、「井上」、「葛」、「郡」などの墨書土器や瓦、和同開珎、獣骨などが出土していることから、国府に関する集落であった可能性が指摘されている。その他にも、球場南西に位置する国府台遺跡第2地点からは8世紀の堅穴住居跡2軒、円面硯、埴が見つかり、これらの調査成果から野球場周辺に国庁を推定することが妥当であると考えられる。そして、この推定国庁の南面から道路①が南へと延びていたとみられる。また、国衙の北を限るのが下総総社跡と市営総合運動場の調査区北側に東西に延びる溝であると推測される。

一方、道路①を南に延長すると、台地南端に当たる第29地点に至る。第29地点では、8世紀～9世紀にかけての墓壇7基と、7世紀～8世紀にかけての堅穴住居跡2軒、9世紀～10世紀にかけての堅穴住居跡27軒、10世紀以降の堅穴住居跡3軒を検出した。遺物は八枚鏡や「所政」墨書土器、湖西産須恵器、灰釉陶器、巡方、鉞尾といった古代の官衙の様相を示すものや、中世貿易陶磁や陶磁器、かわかけといったものが見つかり、古代から中世にかけての土地利用が想定される。また、調査区の南端の台地の切れ間に切通し状道路遺構が確認されている。この切通し状道路遺構は南北50m、台地南端で幅20m、深さ15mで、断面形はV字状で2回の掘込みの痕跡があり、硬化した部分が認められている。溝が西側に1条平行して掘られている。道路から出土した遺物は中世常滑の大甍片が出土しており、少なくとも中世までは道路として機能していたことがわかる。遺物も少なく道路造成の時期を正確には特定できないが、市川砂州から国府台の台地上に向かって登る道路であり、道路①に続くものと考えられる。

それでは、国府台遺跡における道路①以外の道路について見ていく。和洋学園国府台キャンパス内遺跡では、8世紀前葉に南北方向の道路跡（道路⑤）と北西から南東に斜行する東西方向の道路跡（道路③）



第30図 国府台遺跡の古代道路想定図

(1 : 3000)

200m

が敷設される。次いで、8世紀中葉に東西約24m、南北約70mにわたって検出されたL字状に屈折する区画溝と、東西溝に沿った柱列、掘立柱建物跡群、竪穴住居跡群が成立する。竪穴住居跡からは、墨書土器「国」、「葛」や獣骨、鉄滓などが見つかっており、国庁に付随する厨施設や鍛冶工房の存在が想定されている。9世紀初頭に区画溝が機能を失うと、9世紀前葉に南北に延びる2条の並行する溝が検出され、溝間が約15～18mであることから、その間が平安時代の東海道本道（道路②）であった可能性が指摘されている。その後、道路②は9世紀中葉から後葉にかけて機能を失い、10世紀以降には竪穴住居跡が密集して立地するようになる。

道路⑤は両側に側溝を伴い、遺跡内の北で東方へ鋭角気味に折れ曲がる。路面に顕著な硬化面が認められないこと、側溝が8世紀中葉の掘立柱建物跡や溝に壊されていることから、道路⑤が機能していたのは8世紀前葉のみの短期間であったと考えられている。道路⑤をそのまま直線で東に延ばすと、国庁推定地の西面に達する。このことから、短い存続期間と直線的かつ側溝を伴うといった特性を考慮すると、道路⑤は国庁の造営のための官道であったと考えられる。

東西方向の道路③は両側に側溝を伴い、道路幅や形状が道路⑤と酷似していることから、道路⑤と同様に8世紀前葉に敷設され、9世紀中葉まで存続すると推測される。道路③は迅速測図に記された東西方向の道と重なり、東は国府台の台地中央を経て須和田台へと至り、西は里見公園方面に北上し、江戸川の渡河点を経て武蔵国へと至る経路をとる。和洋学園から西に約90mの国府台遺跡第41地点で道路③が検出されている。一方、和洋学園から東の国府台遺跡中央部では第4地点・1で道路③と同様の東西方向に延びる古代以降の溝が4条検出されている。溝の底面が硬化するものもあるとされるが、道路③と関係するのは未詳である。なお、須和田遺跡では「博士館」や「右京」の墨書土器が出土していることから、国府関連施設の存在が想定されており、国府域は須和田台にまで及んでいたと考えられる。

南北方向に延びる道路②は両側に側溝とされる溝をもち、そのうち東側溝は区画溝の機能も有していたとされる。和洋学園国府台キャンパス内遺跡の約60m南の第27地点でも東側の側溝が検出されていることから、道路②は台地の下から台地上に広がる国府域に進入する経路であったと考えられる。道路②は国府台遺跡の北側に位置する第126地点や、国府台遺跡の北隣に位置する新山遺跡や下矢切東台遺跡、作兵衛台遺跡でも該当する遺構が検出されている。第126地点では上端の幅7mで3層の硬化面を有し、側溝を持たない南北方向の溝状の道路跡を検出した。道路の使用時期や廃絶時期を特定するには至っていないが、土師器や須恵器の小片が出土していることから古代の道路跡と考えられている。新山遺跡では、8世紀中葉頃まで遡る幅約6m、深さ約1mの南北方向の道路跡を検出した。道路の底面には2～3条の硬化面が確認できる。出土遺物は土師器、須恵器のほか、近世陶磁器も見ついていることから、近世まで道路として使用されていたと考えられる。下矢切東台遺跡では南北方向に直線状に延びる2条一対の溝が2本検出されている。いずれも両側では幅広い1条の溝となる。1つは芯々間距離が6m、もう1つは3.5mから4mである。後者の溝には硬化面が3層あり、底面には2条の硬化面をもつ。前者からは8世紀前葉の湖西産須恵器片等が出土し、後者からは墨書をもつ土師器片が出土した。いずれの溝も出土遺物から古代まで遡る可能性が指摘されている。作兵衛台遺跡では調査された範囲が狭小であるにもかかわらず、幅約7mの道路跡や覆土に硬化面をもった道路跡を部分的に検出した。下矢切東台遺跡と国府台遺跡第126地点で検出した溝や道路跡と、新山遺跡で検出した道路跡では、規模や形態が異なるが、遺構の存続時期がいずれも古代まで遡るとみられることから、奈良時代の東海道相馬路、平安時代以降の東海道本

道の一部であったと考えられている。

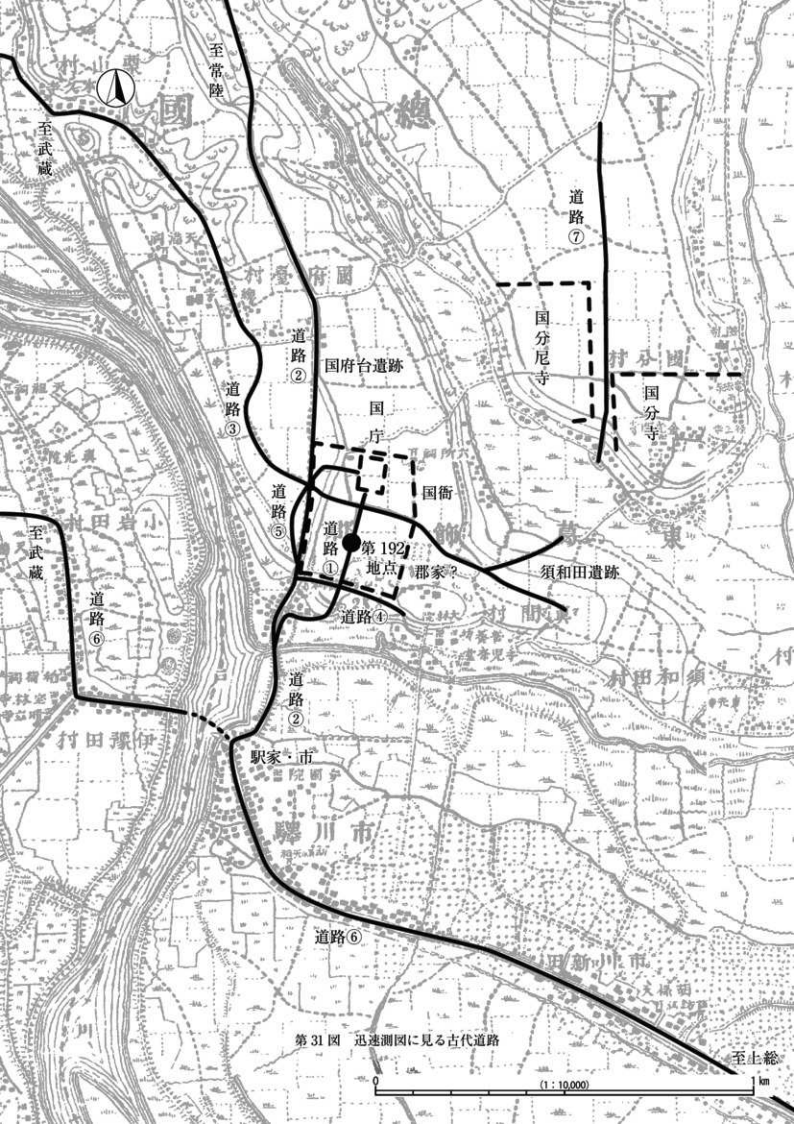
さらに、第192地点から南に約90mの地点である第4地点-2でも、東西に延びる古代の道路跡(道路④)を検出した。道路④は幅2mの波板状凹凸面をもち、北側に幅2.7mの溝が平行している。北側の溝は8世紀前葉の竪穴住居跡を切って掘削されていることから、溝は8世紀中葉以降に設けられた。溝が道路④に伴うもので同時に造営されたとする、道路幅が推定で4m以上の8世紀中葉の道路であると推測される。この道路④を東に延長すると、現在の弘法寺まで台地の南端を通ることから、国衙の南を限る道路であった可能性が高い。

第192地点の周辺には、国庁や国衙を区画する溝が設けられていた。北辺は前述した下総総社跡と市営総合運動場地点で東西に延びる溝、南辺は第4地点-2で道路④の北側に沿って検出された溝、西辺は道路②の東側溝が国衙の範囲を区画する溝であったと考えられる。東辺は第3地点から北に約270mの地点にある千葉商科大学内の第4地点-8である。この地点からは7世紀後葉から8世紀初頭に竪穴住居跡14軒が湖西産須恵器、畿内産土師器、新羅系土器などを伴って突如出現する。しかし、続く8世紀前葉には竪穴住居跡はなくなり、掘立柱建物跡4棟と土坑1基となり、土坑からは馬の頭骨や瓦、須恵器片が見つかっている。また、8世紀後葉には南北に延びる幅4mの大溝が構築されるが、この大溝が国衙の東を区画する溝であったと推測されている。ただし、第4地点-8の南約60mにある第4地点-7で南北溝は検出されておらず、北約45mにある市営総合運動場地点でも、同一の溝と考えられる溝は検出されていない。10世紀中葉以降は再び竪穴住居跡5軒のみとなり、掘立柱建物跡や大溝は確認されていない。

2 下総国府の変遷と道路(第31図)

国府台遺跡で検出された道路跡は、下総国府の造営に伴って敷設された道路である。南北、東西方向ともに直線的に延び、区画溝を伴うものもあることから、国府域においてある程度計画的な道路設計がなされていたと考えられる。ここで、国府と道路、大溝の関係についてまとめる。

下総国府の造営が開始されたのは7世紀後葉から8世紀前葉の時期である。全国的にもこの時期に国府の国庁や郡家の造営が始まる^(注6)。この時期の国府台には南北方向の道路⑤と東西方向の道路③が敷設される。道路⑤は市川砂州上を通っていた上総国府と武蔵国府を結ぶ支路(道路⑥)から分岐して、国府台の台地上に上がって国庁推定地の西面に至る。道路⑤の存続期間が8世紀前葉のみで、両側に溝を持ち、また国庁推定地の東側の下総総社跡や市営総合運動場地点では8世紀前葉から中葉まで竪穴住居跡が増加することから、道路⑤は国庁を中心とした国府造営のために設けられた道路と考えられる。一方道路③は道路⑤と同時期に敷設されたが、9世紀中葉まで存続するため、周辺の建物配置にも影響を与えた。弘法寺境内の国府台遺跡第3地点では、8世紀前葉の掘立柱建物跡3棟と柱列1条は道路③の傾きに近い北東を主軸として造られた。第8地点では、布掘式の掘立柱建物跡1棟を検出している。掘立柱建物跡の主軸の傾きが道路③や第3地点の8世紀前葉の掘立柱建物跡と同様である。道路③が第8地点や第3地点の掘立柱建物跡の立地に影響を与えていることから、道路③が国府台の台地東端付近まで延びていた可能性が考えられる。道路③は国衙の東西軸とも呼べる道路であり、国府城の東西を結ぶ主要な道路であったといえる。また、国府台遺跡北西部に当たる第1地点からほぼ東西方向に延びる幅3.4～3.6mの道路跡を検出している。断面形はやや深い皿状で、底面に波板状凹凸面と硬化面が認められる。出土した遺物は少量で、須恵器片、灰陶器片、近世陶器、牛歯が見つかっている。道路の敷設時期は不明だが、古代の道路跡であるとみられ、江戸川を渡って武蔵国へと続く道路③に接続し、常陸国方面へと通じる道路であ



第31図 迅速測図に見る古代道路

った可能性を考えたい。したがって、道路③は国府の中心部を東西に走るだけでなく、下総国府と武蔵国、常陸国への連絡路の役割を持っていたと考えられる。

8世紀中葉には国府の整備が一層進んだ。国庁と曹司がこの時期までには成立していたと推測され、国分寺の造営が国分台で始まる。この時期の国府台では、道路⑤が廃絶し、新たに東西方向の道路④が台地南端に設けられる。この時期には国衙の整備が完了し、道路④も国衙の南を限る道路として敷設されたと考える。道路①を東に延伸すると現在の弘法寺に突き当たるが、第3地点では8世紀中葉に掘立柱建物跡1棟と柱列2条、溝1条が北を主軸とした造りに変わる。続く8世紀末から9世紀初頭以降、掘立柱建物跡が消滅し、北を主軸とする方形の区画溝3条が掘削される。これらの溝は遅くとも10世紀前葉にはすべて埋没する。隣接する第120地点でも、東西に延びる溝と柱列が検出され、溝の埋没時期は9世紀後葉から10世紀前葉と考えられていることから、第3地点の溝と同一の可能性が高い。出土遺物には灰釉・緑釉陶器や円面硯などがあり、官衙の様相を示す。道路④が北を主軸とする掘立柱建物跡や柱列の配置に影響を与えた可能性が高く、道路④の成立と一体となった整備であったと考えられる。また、その後の区画溝の構築も道路④と向きを合わせていることから、道路④は9世紀まで存続していた可能性が高い。道路④とともに成立した官衙の様相を呈する施設群は、国衙の曹司群や国府城にある国府関連施設の一部、あるいは葛飾郡家であった可能性が考えられる。近在の第57地点からは倉とみられる掘込み地業が成された基壇建物跡も見つかっており、弘法寺周辺には一定規模の施設が集約的に配置されていたとみられる。

そして、南北方向に延びて国庁の南面に通じる道路①が道路④とともに8世紀中葉までに成立したと考えられる。第192地点において8世紀中葉に比定される遺物が最も古いものであること、この時期に国庁が完成するとみられること、道路⑤が廃絶し、台地上に上がる道路が国府台遺跡で道路①以外に確認されていないことが根拠である。国庁と国衙の造営は南北方向の直線道路1条と東西方向の道路2条によって、ある程度計画的な建物配置が行われていたと考えられる。第192地点で検出された道路①は、下総国府造営の基準の1つであった可能性が高い。

続く8世紀後葉から9世紀前葉にかけて国府城と国衙の改変が行われる。全国の国府の調査成果によると、この時期に国庁が掘立柱建物から瓦葺きの礎石建物に建替えられ、国府城の拡大が見られる。下総国府でも国衙を区画する溝も東西南北で成立し、国府城が北東へ広がったと推測される。国庁推定地の北に位置する国府台遺跡第13地点の調査では、9世紀前葉から10世紀にかけての堅穴住居跡が多数検出された。出土した墨書土器に「国厨」、「殖生」などが見られ、国府の厨や国府の業務を支える係丁の居住区があったと考えられる。堅穴住居跡は主軸がやや北西に傾くことから、この時期に新たに敷設された南北方向に延びる道路②の影響を受けているとされる。道路②の東側溝は国衙を区画する溝を兼ねるとともに、道路②は市川砂州で道路⑥から分岐し、低地から台地上へ上がって国府城を南北方向に通じ抜け、常陸国へと続いていた。道路②の敷設の背景には、国府城と国衙の改変のほか、延暦24年(805)の東海道の経路変更も挙げられる。下総国府へは当初上総国府と武蔵国府を結ぶ支路(道路⑥)によって結ばれていたが、宝亀2年(771)に武蔵国が東山道から東海道へ所属替えとなったことから、東海道の本道が相模国府から武蔵国府を経て下総国府に至り、下総国河曲駅で上総・安房国府に向かう支路と常陸国へ向かう本道に経路変更となった。この経路は神護景雲2年(768)に利用者が多いため、道中の駅馬を増やす措置が取られていることから、支路の頃から盛んに使われていたとみられる。そして、延暦24年(805)に武蔵国から下総国府を経て、そこから北上して常陸国に至る経路が本道とされた。この延暦24年(805)

に設定された本道が道路②に当たる。なお、この経路は8世紀代にも東海道相馬路として利用されており、国府台では8世紀前葉の道路③と第1地点で検出された道路跡がそれに相当する可能性がある。道路②が敷設されたことによって、道路⑥から道路①を経て国庁の南で道路③に入って北上するという経路から、道路⑥から国庁や国衙中枢部を経ることなく、直接北上する経路を取ることが可能になった。道路①の西側溝は一度付け替えられ路面幅を縮小させているが、北上する経路の変更に伴って、道路①の規模を縮小した可能性が考えられる。

9世紀後葉から10世紀初頭にかけて、道路②と道路③が廃絶する。また、国衙の東西南北を区画していた溝も廃絶する。道路①と道路④の廃絶時期は不明だが、道路②と道路③や区画溝と同様のこの時期に廃絶した可能性が高い。10世紀代に入ると国府台遺跡の国庁推定地周辺では堅穴住居跡が増加し、掘立柱建物跡が見られなくなることから、国庁の移転が想定されている。道路②と道路③が廃絶した後の和洋学園国府台キャンパス内遺跡では堅穴住居跡が密集し、出土遺物から鍛冶工房の存在が想定されている。国庁の移転に伴って、国府城にも変化が生じたと推測される。その後、11世紀中葉になると、国府台遺跡全域で遺構の検出が乏しくなる。下総総社跡に六所神社が成立するのは11世紀以降とされているが、南に約150mの第4地点・8では11世紀以降とする南北に延びる溝が全部で10条検出されたが、これらは六所神社の境内を区画する溝と、参道の側溝であると推定されている。一方、和洋学園国府台キャンパス内遺跡では東西方向に延びる欄列を伴う深さ0.8mの溝を検出した。この溝は防衛を目的とした施設と考えられている。他にも千葉商科大学内の第4地点・3では東西方向に延びる中世の環濠とされる遺構が検出されているが、詳細な規模は不明である。このように、8世紀から9世紀にかけて国庁や国衙が位置した国府台の台地中央部から南部にかけては、11世紀以降になると土地利用の実態が不明瞭になるとともに、防衛施設が出現するようになる。第192地点の大溝SD-004も幅約4m、深さが最大で2mを測る濠状の遺構であることから、何らかの施設を防衛するための溝であった可能性が高い。この大溝は道路④の西側溝を切って構築されていることから、道路④が廃絶したとみられる10世紀前葉以降に構築されたと推測される。下総国では9世紀後葉から俘囚の反乱や群盗の横行といった国内治安の悪化が目立ち始め、10世紀に入ると承平5年(935)に平氏一族間の抗争から関東諸国を巻き込んだ大規模な反乱となった平将門の乱で、関東諸国の国府が襲撃され、下総国府も打撃を受けたと考えられる。乱後も国内の治安は不安定なままで、天慶9年(946)と天曆3年(950)には下総守が押領使を兼任して随兵を従えることを認められている。さらに11世紀には、長保5年(1003)に平維良が国府や館を焼き討ちし、官物を奪ったとされ、長元元年(1028)に起こった平忠常の乱でも下総国は大きな被害を受けたことから、国府にも何らかの被害があった可能性が高い。一方、10世紀以降になると、国司は任命されても任国に下向せず、目代を派遣して国内統治を行うようになっていったが、その際の統治の拠点として国府、国衙が使用された。このため、国府城にある国司の館など統治拠点となる施設は重要であり、防衛すべき対象であったと考えられる。下総国府・国分寺やその周辺で、これらの戦乱の痕跡を考古学的に示す物証は未だ見つかっていないものの、こうした社会情勢を背景に国府や国衙、国府城の土地利用が10世紀以降に改変を加えられ、大溝などの防衛施設が構築されていったと想定される。なお、確認面からの深さ1.0m～1.2mの8層から10層にかけて灰白色の火山灰を検出している。この火山灰は分析の結果、天仁元年(1108)に噴火した浅間山に由来する浅間B(As-B)と同定された。つまり浅間Bが降灰した12世紀初頭には大溝が存在していたことの傍証となり、第192地点周辺では12世紀初頭にあっても国府城として機能が大

溝によって区画され保たれていたと推測できる。

以上、国府台遺跡における下総国府と道路の関係を概観してきた。第192地点で検出された古代の遺構の性格をまとめると、道路跡は8世紀中葉までに国府をはじめとする国府城の造営に伴って敷設され、9世紀後葉から10世紀前葉にかけての国府と国府城の移転、あるいは規模の縮小に伴って廃絶し、大溝は道路が廃絶した10世紀前葉以降に掘削された防御施設であったと推測した。遺構の時期に関しては主に周辺の調査成果から推測を重ねる形で導き出したものであり、今後周辺の調査の進展に伴って遺構の時期や性格を改めて検証する必要があるだろう。

注1) 本章で言及する遺跡の調査成果については下記の文献を参照した。

- 桑原謙・宮内勝巳 1981 「市宮総合運動場内遺跡」〔昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告〕 市川市教育委員会
小林清隆 1987 「松戸市彦八山遺跡」 財団法人千葉県文化財センター第139集
田村隆・山口典子・上守秀明編 1990 「市川市新山遺跡」 財団法人千葉県文化財センター第173集
斎藤忠昭 1991 「平成2年度市川市埋蔵文化財発掘調査報告」 市川市教育委員会
松本太郎 1996 「国府台遺跡第8地点」〔平成7年度市川市内遺跡発掘調査報告〕 市川市教育委員会
大澤正巳ほか 1996 「下総総社跡発掘調査報告」〔市川市内出土遺物の分析〕 市川市教育委員会
松本太郎・松田礼子 2001 「下総国府跡-国府台遺跡緊急確認調査報告書-」 市川市教育委員会
菊池英ほか 2002 「国府台遺跡(第29地点)」 国府台遺跡第29地点調査会
寺村光晴ほか 2004 「下総国府台 第1～4次発掘調査報告」 和洋学園
市川市教育委員会 2005 「千葉・市川市・国府台遺跡」〔文化財発掘出土情報〕7月号 ジャパン通信情報センター
小山裕之ほか 2009 「国府台遺跡第120地点発掘調査報告書」 玉川文化財研究所
郷堀英司・落合章雄・豊田秀治 2009 「上矢切南台遺跡・下矢切東台遺跡」 千葉県教育振興財団調査報告第627集
橋本勝雄・今泉潔・西野雅人 2010 「市川市稲荷作遺跡・小塚山遺跡・国分下台遺跡」 千葉県教育振興財団調査報告第652集
加藤貴之 2011 「国府台遺跡第126地点」〔平成16～20年度 不特定遺跡発掘調査報告〕 市川市教育委員会
安井健一 2011 「市川市国府台遺跡第13地点(3)」 千葉県教育振興財団調査報告第665集
加藤貴之 2012 「作兵衛台遺跡第2地点」〔平成19・20年度市川市内遺跡発掘調査報告〕 市川市教育委員会
嶋田浩司・糸川道行・大岩桂子 2012 「市川市国府台遺跡第13地点(2)」 千葉県教育振興財団調査報告第688集
今泉潔 2013 「市川市国府台遺跡第13地点(4)」 千葉県教育振興財団調査報告第702集
市川市史編さん歴史部会(古代)下総国府跡研究グループ編 2014 「下総国府跡 遺跡編」 市川市
今泉潔・大久保奈奈 2014 「市川市北下遺跡(9)～(12)」 千葉県教育振興財団調査報告第730集
高野浩之・大橋生 2015 「国府台遺跡-第176地点発掘調査報告書-」 地域文化財研究所
大久保奈奈 2015 「市川市平田遺跡(1)～(12)」 千葉県教育振興財団調査報告第740集
市立市川考古・歴史博物館編 2015 「風説 市川の歴史(第二版)」 市川市教育委員会
望月大輔 2016 「市川市 国府台遺跡第187地点概要」 国府台遺跡第187地点遺跡見学会資料
小林清隆・大久保奈奈 2016 「市川市後通遺跡(1)～(15)」 千葉県教育振興財団調査報告第746集
小林信一・大久保奈奈 2017 「市川市北下遺跡(14)・菅野遺跡(1)～(5)」 千葉県教育振興財団調査報告第766集

注2) 弥生時代後期の土器については以下の文献を参照した。

- 高花宏行 1999 「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の土器変遷について」〔奈和〕37 奈和同人会

- 菊池真ほか 2002 『国府台遺跡(第29地点) 国府台遺跡第29地点調査会』
- 小林嵩 2015 「下総の弥生時代後期の土器編年」『考古学論攷Ⅱ』千葉大学文学部考古学研究室
注3) 古代の道路遺構については以下の文献を参照した。
- 近江俊秀 2006 『古代国家と道路』青木書店
- 木本雅康 2016 『古代の地方道路』『日本古代の交通・交流・情報 三 遺跡と技術』吉川弘文館
注4) 奈良・平安時代の土器については以下の文献を参照した。
- 宮内藤巳 1983 「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『房総における奈良・平安時代の土器』史館同人
- 宮内藤巳 「下総西部の土器編年について」『古代末期の葛飾郡』崑書房
- 市川市教育委員会編 1996 『市川市内出土遺物の分析』市川市教育委員会
- 松本太郎・松田礼子 2001 「下総国府跡-国府台遺跡緊急確認調査報告書-」市川市教育委員会
- 寺村光晴ほか 2004 「下総国府台 第1～4次発掘調査報告」和洋学園
- 郷脇英司 2004 「土器の生産と流通」『千葉県歴史』資料編 考古4 千葉県史料研究財団
注5) 下総国府に関する調査成果と道路遺構については、前掲注1) 文献のほかにも、以下の文献を参照した。
- 山路直充 1997 「下総国府における主要道路」『平成9年度企画展図録 古代の道と旅 千葉県立房総風土記の丘』
- 山路直充・湯浅治久・池田真由美 1997 「国府台旧所在の六所神社について」『市川市川考古博物館研究紀要』2 市川市川考古博物館
- 山路直充 1998 「下総国府における主要道路(補遺)」『市川市川考古博物館研究紀要』2 市川市川考古博物館
- 山路直充 2010 「ヤマトタケルの江戸川渡河伝説」『市史研究いちかわ』1 市川市
注6) 国府の変遷については以下の文献を参照した。
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 寺村光晴・早川泉・駒見和夫編 1999 『古』の国府を掘る』雄山閣
- 金田章裕 2002 『古代景観史の探求』吉川弘文館
- 江口桂 2014 『古代武蔵国府の成立と展開』同成社
- 大橋泰夫 2018 『古代国府の成立と国郡制』吉川弘文館

附章 国府台遺跡第192地点のテフラ分析

藤根 久・鈴木正章（パレオ・ラボ）

1 はじめに

国府台遺跡第192地点の調査において、9世紀以降に掘られた大溝の堆積物中からレンズ状火山灰層が検出された。ここでは、この火山灰層の鉱物組成の分析や、火山ガラスの形態分類と屈折率測定を行い、火山灰層の検討を行った。なお、同層に含まれていた白色軽石についても同様の方法で検討した。

2 試料と方法

分析試料は、国府台遺跡第192地点の大溝SD-004堆積物から採取された火山灰層と同層に含まれていた白色軽石の2点である（第8表）。

第8表 分析試料とその特徴

分析No.	遺構	試料	層位	色調	備考
1	大溝SD-004	覆土	覆土中層	にぶい黄褐色 (10YR 6/3)、レンズ状に堆積	分析No.2の白色軽石を含む
2		軽石		白色軽石 (有色鉱物を多く含む)	

各試料を、以下の方法で処理した。

火山灰層は、湿重で52.72gを秤量した後、1φ(0.5mm)、2φ(0.25mm)、3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)の4枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。これとは別に10g程度を、恒温乾燥機105度で24時間乾燥させて、含水率を求めた。白色軽石(長軸:34mm、短軸:16mm、約1.0g)は、アルミナ乳鉢で粉砕した後、湿式篩分けして4φ篩残渣を回収した。

各試料の4φ篩残渣について、重液(テトラプロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物については、水浸の簡易プレバートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に従って、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破砕型フレーク状(c1)、急冷破砕型塊状(c2)に分類した。重鉱物については、封入剤レークサイドセメントを用いてプレバートを作製し、斜方輝石(Opx)、単斜輝石(Cpx)、角閃石(Ho)、カンラン石(Ol)、磁鉄鉱(Mg)を同定・計数した。

なお、分析No.2中の軽石については、乳鉢で軽く粉砕した後、4φ篩残渣を回収して、同様に重液分離を行った。

各試料の4φ残渣中の火山ガラスおよび軽石ガラスは、横山ほか(1986)に従って温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

3 結果

以下に、各試料の粒度組成の概略、重鉱物および軽鉱物の組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラス・軽石ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定結果について述べる。

【分析No.1(火山灰層)】

試料は、にぶい黄褐色(10YR 6/3)を呈し、レンズ状に堆積する。

粒度組成は、3φ篩残渣が最も多い。重液分離では軽鉱物の割合が高い(第9表)。

火山ガラスは、バブル型平板状ガラス(b1)、バブル型Y字状ガラス(b2)、軽石型スポンジ状ガラス(p2)をわずかに含む(第10表)。

重鉱物は斜方輝石 (Opx) が多く、角閃石 (Ho) や単斜輝石 (Cpx) を含み、カンラン石 (Ol) をわずかに含む (第10表)。

火山ガラスの屈折率測定では、バブル (泡) 型ガラスが範囲 1.4983-1.5003、平均 1.4992、軽石型ガラスが範囲 1.5260-1.5308、平均 1.5290 であった (第32図)。

【分析 No.2 (白色軽石)】

試料は、白色軽石である (図版 13-2a)。

火山ガラスは、主に軽石型スポンジ状ガラス (p2) からなり、バブル型 Y 字状ガラス (b2) と軽石型繊維状ガラス (p1) がわずかに含まれる (表3)。重鉱物は角閃石 (Ho) が多く、斜方輝石 (Opx) を含む (第10表)。

火山ガラスの屈折率測定では、範囲 1.4995-1.5023、平均 1.5010 であった (第32図)。

第9表 テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

分析No.	処理温度 (g)	含水率 (%)	乾燥重量 (g)	砂粒分の粒度組成 (重量 g)				軽・重鉱物組成 (重量 g)	
				1φ	2φ	3φ	4φ	軽鉱物	重鉱物
1	52.72	3.52	50.86	0.01	0.11	13.21	9.19	0.51	0.06

第10表 4φ篩残渣中の鉱物組成

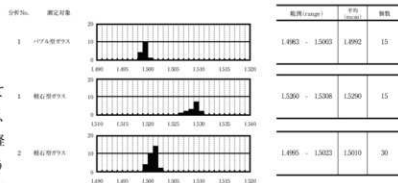
分析No.	石英 (Qtz)	長石 (Fs)	不明 (Opq)	火山ガラス					ガラス合計	軽鉱物合計	重鉱物					重鉱物の合計		
				バブル (泡) 型		軽石型		急冷破砕型			斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	珪石 (Mg)	不明 (Opq)			
				平板状 (b1)	Y字状 (b2)	繊維状 (p1)	スポンジ状 (p2)	フレーク状 (c1)									塊状 (c2)	
1	17	79	302	2	1		1			4	402	122	34	51	2	13	37	259
2			302		1	1	35			37	239	25		152		67	1	245

4 考察

大溝 SD-004 の覆土中層において検出された火山灰 (分析 No.1) は、少量のバブル (泡) 型ガラスと軽石型ガラスを含んでいた。このうちバブル (泡) 型ガラスは、屈折率範囲から始良 Tn テフラ (AT) と

考えられる。また、軽石型ガラスは高い屈折率範囲を示しており、浅間 B テフラ (As-B) と考えられる。この大溝 SD-004 は、調査所見から 9 世紀以降の遺構と推定されているが、覆土中層において浅間 B テフラ (As-B) を含むため、大溝 SD-004 は 12 世紀には存在していたと考えられる。なお、始良 Tn テフラ (AT) については、大溝 SD-004 が関東ローム層を掘り込んでいるため、混入したと推定される。

一方、同層に含まれていた白色軽石は、角閃石を特徴的に多く含み、斜方輝石を伴い、軽石型ガラスの屈折率範囲から、榛名ニッ岳洪川テフラ (Hr-FA) または榛名ニッ岳伊香保テフラ (Hr-FP) の軽石と考えられる。なお、この白色軽石は、榛名ニッ岳洪川テフラまたは榛名ニッ岳伊香保テフラの分布域から、この地域における降下軽石ではなく、河川による漂着軽石と考えられる。遺跡が標高の高い台地上にあるため、この白色軽石は、人為的にもたらされた可能性が高い。



第32図 火山ガラスの屈折率測定結果

以下に、各テフラの噴出年代や鉱物組成の特徴について述べる。

浅間 B テフラ (As-B) は、AD 1108 年 (天仁 1 年) に浅間火山から噴出した降下軽石 (pfa)、降下スコリア (sfa)、降下火山灰 (afa) からなり、分布は東に 150km 以上に及ぶ。主な鉱物は、斜方輝石 (Opx) と単斜輝石 (Cpx) である。軽石ガラスの屈折率は 1.524-1.532 で高い値を示し、斜方輝石の屈折率は 1.708-1.710 である (町田・新井, 2003)。

始良 Tn テフラ (AT) は、南九州始良カルデラを噴出源として噴出した降下軽石 (pfa)、巨大火砕流堆積物 (pfl) とその降下火山灰 (afa) からなる。このテフラは、日本列島をすっぽりおおい、日本海全域、朝鮮半島、東シナ海、太平洋四国海盆を広く覆っている。分布は 1,200km 以上に及ぶ。主な鉱物は、斜方輝石 (Opx) と単斜輝石 (Cpx) で、少量の石英 (Qt) を含む。火山ガラスの屈折率は 1.498-1.501、斜方輝石の屈折率は 1.728-1.734 である (町田・新井, 2003)。

榛名ニツ岳伊香保テフラ (Hr-FP) は、6 世紀中葉に榛名火山から噴出した降下軽石 (pfa)、火砕流堆積物 (pfl) からなり、分布は北東に 300km 以上の仙台まで及ぶ。主な鉱物は、角閃石 (ho)、斜方輝石 (Opx) からなる。火山ガラスの屈折率が範囲 1.500-1.504 (1.502-1.503)、斜方輝石の屈折率が範囲 1.708-1.712、角閃石の屈折率が範囲 1.672-1.712 である (町田・新井, 2003)。

榛名ニツ岳渋川テフラ (Hr-FA) は、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した降下火山灰 (afa)、火砕流堆積物 (pfl) からなり、分布は東 (南) に 80km に及ぶ。主な鉱物は、角閃石 (Ho)、斜方輝石 (Opx)、堇青石 (Cd) である。火山ガラスの屈折率は 1.500-1.502、斜方輝石の屈折率は 1.707-1.711、角閃石の屈折率は 1.671-1.695 である (町田・新井, 2003)。

引用文献

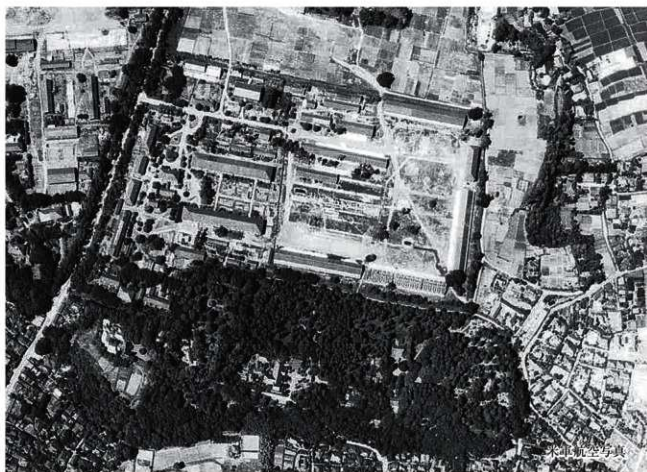
町田洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 336p, 東京大学出版会。

横山卓雄・檀原徹・山下透 (1986) 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定, 第四紀研究, 25, 21-30。

写 真 图 版



航空写真 (S=1/10000)



石器出土状況 (北から)



石器出土地点土層断面 (北から)



SI001 (北から)

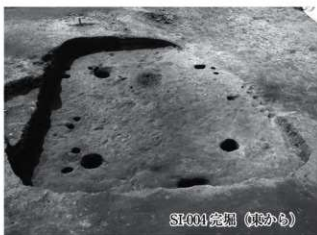


SI002 (北から)





SI-004 遺物出土状況 (南から)



SI-004 完掘 (南から)



SI-004 入口構造 (南から)



SI-004 調査風景 (南から)



SI-001 全景 (南から)





SP-001 調査前風景 (南側・北から)



SD-001 調査風景 (南から)



SX-002 調査風景 (南から)



SP-001 礎石面 (南から)



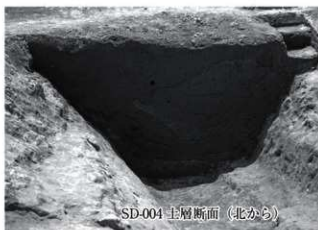
SP-001 山砂敷設 (南側)



SD-004 (北から)



SD-004 土層断面 (北から)



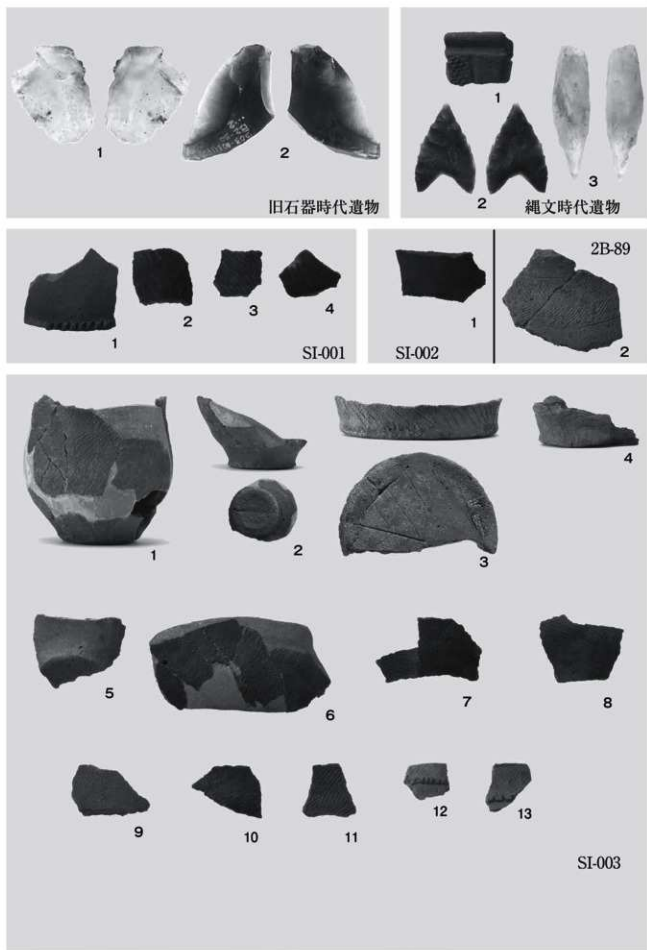
SD-004 土層断面 (北から)



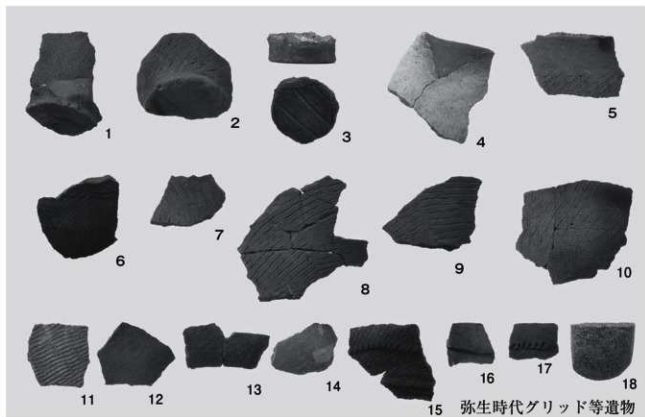
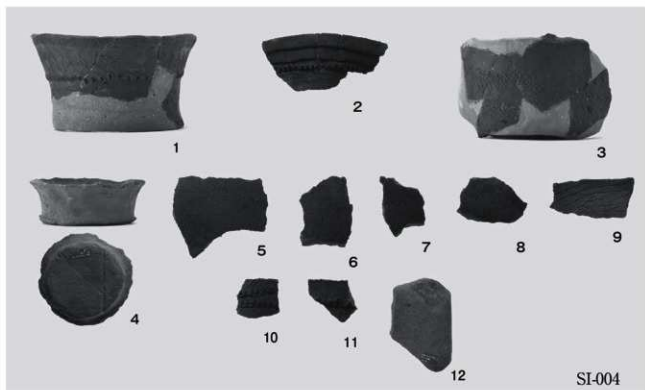
SD-004 火山灰 (北から)

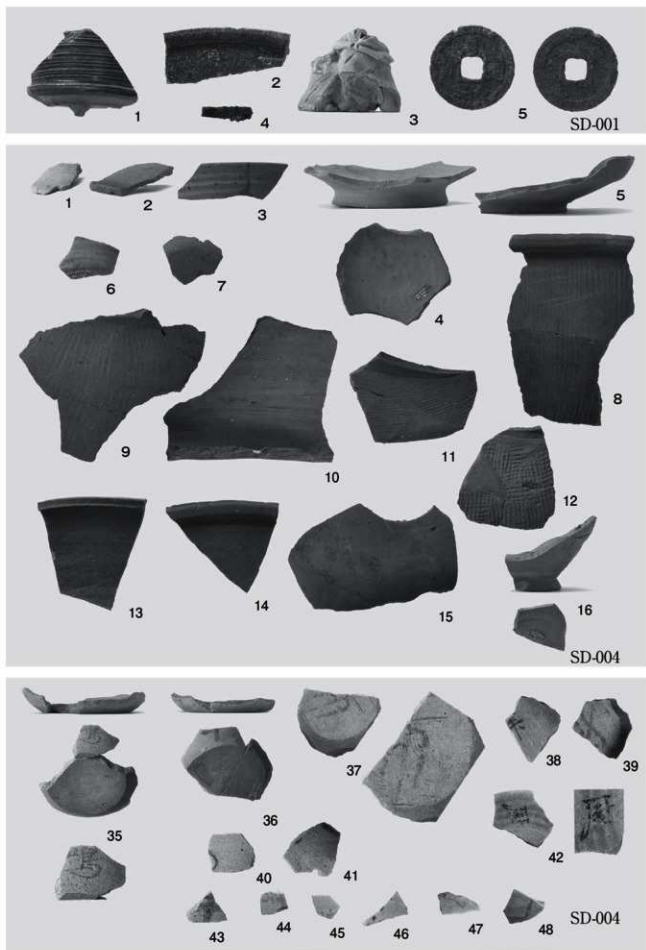


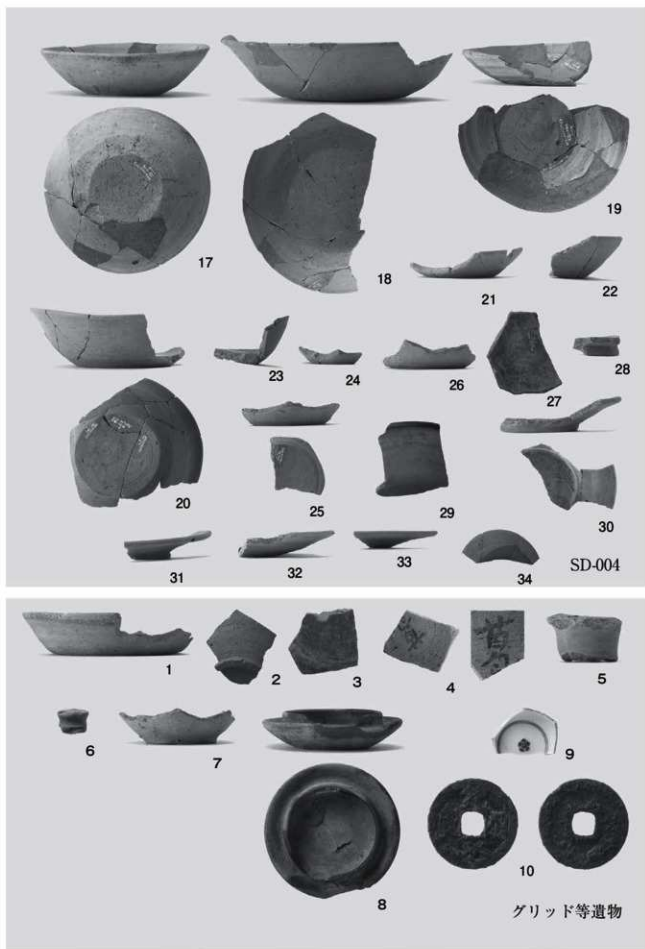
SD-004 調査風景 (南から)



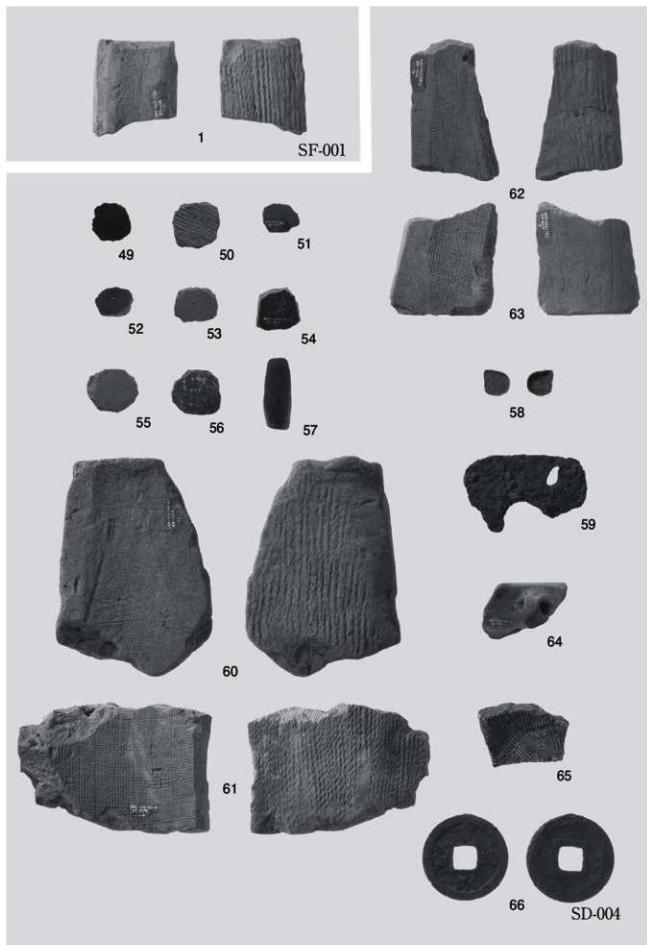
旧石器時代遺物・縄文時代遺物・SI-001・002・003

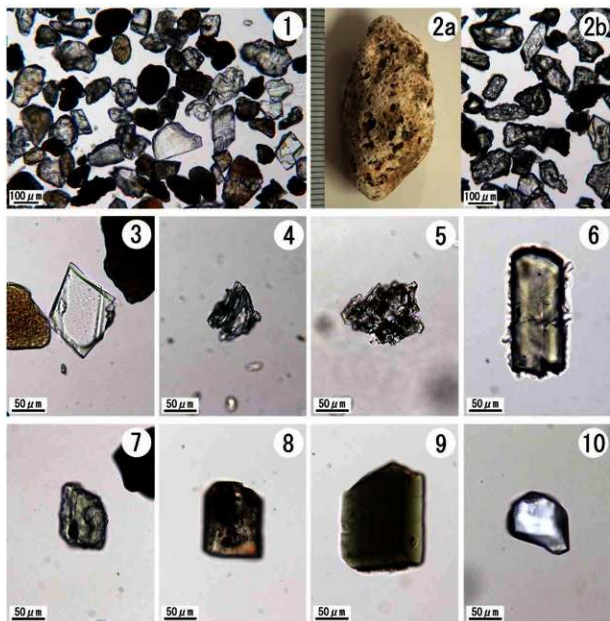






SD-004 (2)・グリッド等遺物





テフラ分析試料の偏光顕微鏡写真

- 1.4 φ軽鉱物 (分析 No.1) 2a. 白色軽石 (分析 No.2) 2b.4 φ軽鉱物 (分析 No.2)
 3. バブル (泡) 型平板状ガラス (分析 No.1) 4. 軽石型スポンジ状ガラス (分析 No.1)
 5. 軽石型スポンジ状ガラス (分析 No.2) 6. 斜方輝石 (分析 No.2) 7. 単斜輝石 (分析 No.1)
 8. カンラン石 (分析 No.1) 9. 角閃石 (分析 No.2) 10. 不明 (分析 No.2)

報告書抄録

ふりがな	いちかわしこうのだいせいせきだい192ちてん							
書名	市川市国府台遺跡第192地点							
巻次								
副書名	国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書1							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	落合章雄 垣中健志							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2019年3月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
国府台遺跡 第192地点	市川市国府台 一丁目2-5ほか	12203	003 (192)	35度 44分 29秒	139度 54分 20秒	20161115～ 20170310 20170414～ 20170616	3.825㎡	国府台県営住宅 建替工事
				世界測地系 WGS84				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国府台遺跡 第192地点	包蔵地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	竪穴住居跡 道路跡・溝		石器 縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器・埴輪 土師器・須恵器・緑軸 陶器・灰軸陶器・土製 品・瓦・金属製品 土師質土器・陶器・磁 器・瓦・銭貨		下総国国庁推定地 に延伸する道路跡 を検出	
要約	調査地点は江戸川の支流に開析された標高22mの台地上にある。旧石器時代では黒曜石製剥片とチャート製ナイフ形石器を検出した。縄文時代では少量の土器片と石器を検出した。弥生時代では後期後葉から末葉と考えられる竪穴住居跡4軒を検出した。古墳時代前期の土器片も少量検出したことから、国府台遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の変遷を知る上で貴重な資料が得られた。奈良・平安時代の東西に側溝をもつ道路跡は南北方向に延び、北に延伸すると下総国国庁推定地の南面に至る。道路跡は8世紀中葉までに敷設し、9世紀後葉から10世紀前葉までには廃絶したと推定される。さらに、10世紀前葉以降に道路の西側溝を壊して掘削されたとみられる防御施設としての性格が強い大溝を検出し、下総国府の造営と変遷の一端を明らかにする貴重な調査成果を挙げることができた。							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第30集

市川市国府台遺跡第192地点

— 国府台県営住宅建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書1 —

平成31年3月28日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉県中央区市場町1-1
印刷 株式会社弘文社
千葉県市川市川南2-7-2
